人間環境科学 第9巻 25～73（2000）

ウィーンのオペレッタ 3
金の時代

客員研究員 増 田 芳 雄

目次

はじめに
Ⅰ．ズッペ
Ⅱ．ミレッカー
Ⅲ．ツェラー
Ⅳ．オスカー・シュトラウス
Ⅴ．金の時代のオペレッタ
むすび
引用文献

はじめに

前報と前々報でワルツ王ヨハン・シュトラウスの16＋1のオペレッタのうち、現在も演奏されている4曲を取り上げて論議した（増田芳雄、1998, 1999）。何といっても19世紀ウィーンの大衆音楽を代表するのはシュトラウスのワルツであり、ポルカである。シュトラウスはその後半生、オッフェンバックに触発されてオペレッタを16曲も作曲したが、その大部分は台本に恵まれず、成功しなかった。しかし、そのうちの3－4曲はいわばオペレッタの珠玉とも言えるもので、ウィーン・オペレッタの「黄金時代」を築きあげた。たしかにシュトラウスは天才的、その楽想は際立っているので、オペレッタのどれを聴いてもその独特のリズムとメロディーに魅せられてしまう。ウィーンのオペレッタはドイツ生まれのユダヤ人で、フランスで活躍したオッフェンバックに触発されたことは確かだが、その独特の音楽的伝統があればこそウィーン特有のオペレッタが誕生したともいえる（Nick, 1954）。

この19世紀ウィーンにおけるオペレッタ「金の時代」はシュトラウスが中心であることはまぎれもない事実であるが、この時代を創りあげた作曲家は他にもいる。そこで本稿では、ズッペ、ミレッカー、ツェラーそしてオスカー・シュトラウスという優れた4人の作曲家による、現在でもよく演奏上演されるいくつかのオペレッタを取り上げてて、「金の時代」を論議したい。

Ⅰ．ズッペ（Franz von Suppe）

ズッペの名は「詩人と農夫」、「軽騎兵」序曲などで一般によく知られている。実はウィーンでオペレッタを作曲した最初の人はこのズッペである。それは「寄宿学校」（Das Pensionat）

で、1860年のことであった。その後1865年に「美しきガラテア」(Die schöne Galathee)、「ファティニッツァ」(Fatinitza)、そして大成功作である「ボッカチオ」(Boccaccio) を1879年に初演した。こうしてウィーン最初のオペレッタを作曲したことから、ズッペは「ウィーンオペレッタの父」と呼ばれることもある。

ズッペは1819年4月18日、現在ユーゴースラヴィア領ダルマチア (Dalmatien) のスパラート (Spalato, 現ユーゴースラヴィアではスプリット、Split) で生まれた。ダルマチアはかってハンガリー、トルコの支配下にあったが、1797年からヴェネチア領、さらにナポレオン時代にオーストリア・ハンガリー二重帝国の一部となり、1805年からはイタリア領、そしてウィーン会議の1814年から再びオーストリア領となった。従って、ズッペはオーストリア人ということになる。

ズッペの家はもともとベルギー系であったが、父は官吏で、母はスラブ系 (イタリア系ともいう) のウィーン娘であった。ズッペは早くから楽才を示したが、パドヴァ (Padova) で法律を学んだ。しかし、ズッペは音楽が好きで、父の亡くなった後の1835年、母方の祖父の住むウィーンに移った。ここで音楽院に学び、1840年から新設のヨーセフ・シュタット劇場の指揮者となり、作曲を始めた。さらにアンデアウィーン劇場でもイタリア・オペラの指揮をした。

1846年、民族劇「詩人の農夫」(Dichter und Bauer) の付随音楽を作曲したが、その序曲は大変な人気を呼んだ。ヨーゼフ・シュタット劇場が1847年カール劇場と改名し、オッフェンバックのオペレッタが上演され、作曲者自身も劇場を訪問した。これに刺激を受けたズッペはオペレッタ「寄宿学校」を作曲した。その初演は1862年であったが、これが最初のウィーン・オペレッタと言われる。この後15年間にズッペはさらに「10人の乙女と男不在」(Zehn Mädchen und kein Mann)、「陽気な若者」(Flotte Bursche) を作曲、1865年、オッフェンバックの「美しきヘレナ」に対抗して「美しきガラテ」(Die schöne Galathee) を作曲、また「軽騎兵」(Die Leichte Kavallerie)、「ファティニッツァ」、「山賊の仕業」(Banditenstreiche) を作曲したが、1876年カール劇場で初演されたこの「ファティニッツァ」は大成功を納め、ズッペは莫大な報酬を得たという。「軽騎兵」も「ファティニッツァ」も現在では序曲が演奏されるのみである。さらに、「ドンナ・ユアニータ」(Donna Juanita)、「ガスコーナー」(Gascogner) ,「アフリカ旅行」(Die Afrikareise)、を作曲し、そして「ファティニッツァ」と同じカール劇場で1879年に初演された「ボッカチオ」は大ヒットとなった (Wurz, 1969)。しかし、その後作曲した数曲のオペレッタは「ファティニッツァ」や「ボッカチオ」のような成功を得ることが出来ず、ズッペは晩年病にかかり、1895年5月25日に世を去った。あまり知られていないが、彼はオペラ「船乗りの帰郷」(Des Matrosen Heimkehr) , あるいはオペレッタ「モデル」(Das Modell) なども作曲している (Wurz, 1978)。筆者はこのうち「美しきガラテ」をウィーンのフォルクスオーパーで1回観たが、「ボッカチオ」は大阪で日本の喜歌劇団が上演したのを観ただけである。西洋人が日本の歌舞伎を演じるようで、あまり感心しないが、本場のオペレッタを鑑賞するための啓発くらいにはなるかも知れない。この二つのオペレッタには全曲レコードが幾つかあるので、以下にズッペのこの2つのオペレッタについて論じたい。

A.「美しきガラテ」

オッフェンバックの「美しきヘレナ」の向こうを張って作られたこのオペレッタはギリシャ神話から題材を得たヘンリオン(Poly Henrion)の台本によっており、1865年9月9日にウィーンで初演された。

1.「美しきガラテ」のストーリー

Hendrik Goltzius, *Pygmalion und Galathea*, Kupferstich 1593

図1. ガラテとピグマリオン(1593年の銅版画、1981年10月24日のフォルクスオーパー・プログラムから)。

このギリシャ神話を題材にした(図1)わずか1幕の短いこのオペレッタの舞台はキプロス島(Island of Cyprus)である(Scherle, 1974; Wuerz, 1978)。主な登場人物は**表1**に示すように、わずか4人である。オペレッタはまず序曲に始まり、**表2**に示すアリアや重唱が歌われる。

彫刻家ピグマリオンのアトリエである。ピグマリオンは留守なので、召使いガニメートは鬼の居ぬ間にとワインを飲んでご機嫌である(2)。そこへ美術収集家のミダスが来て、ピグマリオンが制作中の美しいガラテを見せろ、とガニメートに頼む。ガニメートは「それは絶対に駄目」と断るが、ついに買収され、ミダスはガラテを見るや忽ちその魅力の虜になって「私のガラテ物語」と歌う(3)。そこへピグマリオンが帰ってきてミダスを放り出す(4)。ピグマリオンはガラテを理想の女性にしようとするが、それは、彼女は彼一人のもので、美しく、何より良いのは彼女は喋らないことである。彼女は理想の女性としてのすべての資質を備えている。

表1.「美しきガラテ」の登場人物。

ガラテ（Galathee, eine Statue）	美しいヌードの石像（ソプラノ）
ピグマリオン（Pygmalion, ein jünger Bildauer）	若い彫刻家（テナー）
ガニメート（Ganymed, sein Diener）	その召使いの少年（メッツォソプラノ）
ミーダス（Mydas, ein Kunstsammler）	美術品蒐集家（テナー）

表2.「美しきガラテの音楽」

1. Overtuer	序曲
2. Intoroduction(Ganymed/Chor): Aurora erwacht - Zieht in Frieden	導入部（ガニメートと合唱）オーロラは目覚めた一隙間風が入る
3. Ariette des Mydas: Meinem Papi Gordios	ミーダスのアリア：私のお父さんゴルディオス＊
4. Terzetto Pygmalion/Ganymed/Mydas:Hinaus!	ピグマリオン、ガニメート、ミーダスの3重唱：出て行け
6. Duett Galathee-Pygmalion: Ah！ Sie regt sich -Gefühl so warm, so süss	ガラテとピグマリオンの2重 彼女は動く、温かくて甘美だ
7. Rezitativ und Arie der Galathee: Was sagst du? -Leise bebt und zaub'risch schwebt	ガラテのレシタティーフとアリア：何と言うの？静かに揺れ、ふわふわ浮かぶ
8. Couplet des Ganymed: Wir Griechen	ガニメートのクプレ：私たちギリシャ人
9. Terzett Mydas/Galathee/Ganymed: Seht den Schmuck, den ich für Euch gebracht	ミーダス、ガラテ、ガニメートの3重唱：この装飾品を見てごらん。お前のために持ってきたんだよ。
10. Trinklied Galathee/Ganymed/Pygmalion/Mydas: Hell im Glas	乾杯の歌（ガラテ、ガニメート、ピグマリオン、ミーダス）：グラスを空けよう！
11. Kuss-Duett Galathee/Ganymed: Ach mich zieht's zu dir	接吻の2重唱（ガラテ、ガニメート）：君に惹かれる！
12. Finale (Pygmalion/Ganymed/Mydas): O Venus! Lass sie werden, was sie war	フィナーレ（ピグマリオン、ガニメート、ミーダス）：オー！ヴィーナスよ。彼女を元通りにして下さい！

（＊上記の和訳については橋木郁子氏にご教示を頂いた。厚くお礼申し上げる）

すなわち、思慮分別があり、従順で、美しく、そして上品である。そして、彼はこの理想の女性を世間の眼に触れないようにしようとする。しかし、彼女にはたった一つの欠点がある。それは彼女は石で出来ていることである。彼は自分の作った彫刻のガラテと恋に落ち、「私の愛する彫刻」と歌う。そして、ついに美の神ヴィーナスにガラテを生きた女性にしてほしいと頼む(5)。ピグマリオンたちは生きたガラテを讃歎する(6)。人間となったガラテは「不思議なことが起こった」とワルツを歌う(7)。美しいガラテに夢中なピグマリオンはたちまち現実に引き戻される。それは、お腹の空いたガラテは彼に食べ物を注文するので、彼は買い物に行く。そ

の留守にガニメートが現れ、ガラテと恋の火遊びをする(8)。そこへミダスも現れ、「私は美の賛美者」とガラテの愛を求め、ガラテに宝石を与えて彼女(9)を飾る。

そこへピグマリオンが帰ってきて、「いったいどうしたことか」と3人で歌い、ピグマリオンは「乾杯の歌」を歌う(10)。こうしてピグマリオンは生きたガラテが理想の女性ではなく、他の女たちと一つも違わないことを知る。すなわち、彼女も気分屋で、気位が高く、綺麗な衣装や装飾品が好きで、虚栄心が強く、不実、と女のすべての欠点を備えている。ガラテはミダスの贈り物を受け、ガニメートと恋をして「恋の手習いの2重唱」を歌う(11)。ピグマリオンは深く失望し、ゼウスに頼んでガラテを再び石に戻してもらう(12)。ピグマリオンは石に戻ったガラテをミーダスに売り、ガラテは、すべての形と姿の女性を愛するこの美術収集家のコレクションに加えられる。

2.「美しきガラテ」の音楽

ズッペの一家がダルマチアに移る前にイタリアに住んでいたためか、ズッペの音楽はイタリア風の明るい、情熱的なメロディー、ウィーン風の繊細さ、それにオッフェンバックの影響によるパリ風の混じり合った特徴をもつといわれる（寺崎裕則、1983)。それはこのオペレッタだけでなく、「軽騎兵」序曲や「ボッカチオ」の音楽にも見られる。

1981年10月24日、筆者はウィーンのフォルクスオーパーでこのオペレッタを観る機会を得た。**表3**に示すように、歌い演じたのはフォルクスオーパーのオールスター・キャストで、当時まだ若かったメラニー・ホリデイがガラテを演じ、幕が上がると観客には背を向けてはいたが、

表3.「美しきガラテ」のウィーン・フォルクスオーパーにおける演奏者と、全曲レコードの演奏者。

登場人物	フォルクスオーパー	レコード(Eurodisc87583IE)
Pygmalion, ein Bildhauer	Adolf Dallapozza	Rene Kollo
Ganymed, sein Diener	Elisabeth Kales	Rose Wagemann
Mydas, Kunstenthusiast	Karl Dönch	Ferry Gruber
Galathee, eine Statue	Melanie Holliday	Annna Moffo

完全なヌードで観衆は息を飲んだ。ピグマリオンがダラポッツァ、ミダスがデンヒ、ピグマリオンの召使いガニメート（少年役をメッツォソプラノが歌う）がエリーザベト・カーレスという豪華なものであった。メラニー・ホリデイの魅力的な声と姿、そして踊りは日本でも人気があり、彼女は毎年のように日本へやってくるが、人気は衰えない。40半ばを過ぎた今の彼女が「メリー・ウイドウ」でフレンチ・カンカンを踊るのも長くは続かないであろう。しかし、この時の彼女の容色と声は最盛期で、「美しきガラテ」でヌードのガラテを演ずることのできるソプラノはホリデイ以外には居なかったであろう。フォルクスオーパーの総支配人を兼ね、舞台でも長く歌ったデンヒは貫禄であるし、フォルクスオーパーを代表するテナーであるダラポッツァの歌唱は艶があり、安心して聴いて居れる。カーレスの声も美しく、今や同歌劇場の

花形女性歌手で、3枚目役のガニメートをよくこなしていた。

この日、「美しきガラテ」は短い1幕物なので、「美しきガラテ」に続きオルフ（Carl Orff）の「賢者」（Die Kluge）が上演された。

表3に示したように、筆者はこのオペレッタの全曲レコードを1種類所持している。これも豪華キャストで、ガラテがアンナ・モッフォ、ピグマリオンがルネ・コロ、ミーダスがグルーバー、そしてガニメードがローゼ・ワーゲマンである。アンナ・モッフォの声は筆者の好みではないが、ルネ・コロの声は美しいし、グルーバーは定評あるテナーである。

現在、このオペレッタがあまり上演されないのは残念である。

B.「ボッカチオ」

有名な台本作家ツェルとジュネー（F. Zell; R. Genee）の台本によるこの3幕オペレッタは1979年2月1日、ウィーンにおいて初演された。とにかくこのオペレッタは有名で、日本でも大正4年(1915) 9月、東京の帝国劇場で小林愛雄訳詞によって上演されたという。また、榎本健一、二村定一らの浅草オペラで昭和6年以来よく上演されたともいう。なかでも「恋は優し」は一世を風靡した。残念ながら筆者はウィーンでこれを観る機会を得ていない。国内で観たものをここで紹介する必要もないので、所持するレコードをもとに論議したい。

1．14世紀イタリアとルネッサンス（Renaissance）について

「ボッカチオ」の舞台は14世紀のフィレンツェ（Firenze）である。フィレンツェはトスカーナ（Toscana）の中心地であり、ルネッサンス文化の中心地でもある（図2）。ここは近世はじめに繁栄した都市国家で、13世紀には小市民が力を持って法令を制定、民主政治が確立した。そしてピサ（Pisa）やシエナ（Siena）などを征服し、トスカーナの覇者となった。15世紀以降は金融業者メディチ家の独裁体制ができ、以後共和政治が復活したが、16世紀初めにメディチ家が復興し、コジモ1世がトスカーナ公国を建設、共和制は滅びた。

13世紀末のイタリアは、ローマ教皇領以外、おおよそ次の5つの國からなっていた：ミラノ（Milano）、ジェノヴァ（Genova）、ヴェネチア（Venezia）、フィレンツェ（Firenze）、ナポリ（Napoli）（渡辺忠雄、1985）。ルネッサンスがイタリアに成立したのは次の理由によるという（西洋史事典、1983）。(1)イタリアが東方貿易を独占した結果、都市と市民層の興隆が起こり、封建勢力が打倒されて、独自の文化を育成する基盤ができた；(2)地理的、歴史的に古典文化を継承しうる立場にあった；(3)中世のイタリアはヨーロッパの他の国にくらべ、政治的、経済的に流動的で、精神的にもルネッサンス運動のための素地があった；(4)さらに、東方貿易を通じてイスラム、ビザンチンの影響を受けた、など。

イタリアはその後、15世紀末の対フランスの「イタリア戦争」、18世紀のメディチ家断絶後のトスカーナ公国をオーストリア・ハプスブルクが獲得、などの春秋に富んだ変遷を経て、19世紀「イタリア統一戦争」により国家として遂に統一された。「ボッカチオ」はメディチ家による公国設立前、小市民が繁栄した民主主義の自由な時代を背景にしている。

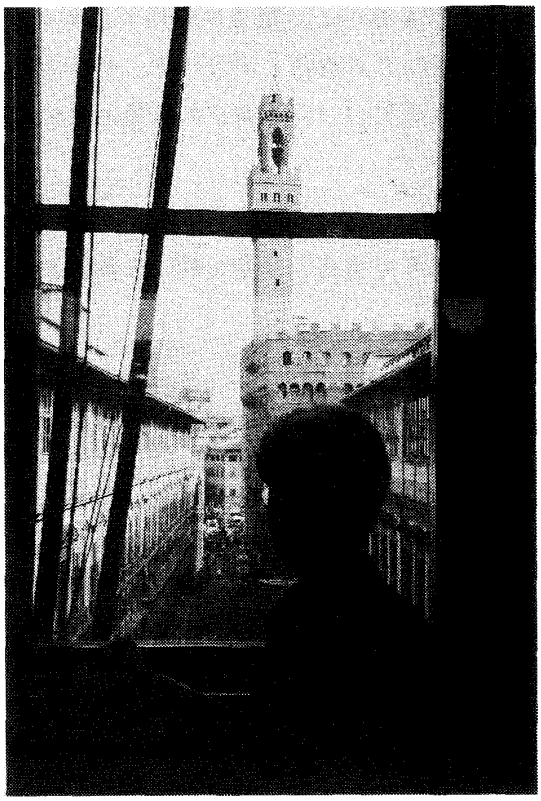


図2．フィレンツェ（筆者写す）。ウフィッツィ美術館（Galleria degli Uffizi）
回廊からドゥオモ、市役所を眺める。

2．ボッカチオ（Giovanni Boccaccio, 1313-1375）

ペスト大流行中の1348－53年、「デカメロン」（十日物語、Decameron）を書いたボッカチオ自身を登場させたツェルとジュネーの変わった台本によっている。まず、ボッカチオという人物、そしてその代表作「デカメロン」について簡単に述べておきたい（野上素一、1972a, b）。

フィレンツェの近くで生まれたイタリアの小説家ボッカチオははじめナポリへ行って商業見習いをしたが、以後多くの作品を書いた。1865年以後、教皇ウルバヌス５世のフィレンツェ特派使節となり、アヴィニオン、さらにローマに派遣された。晩年、ダンテの「新曲」の注釈付講義をすることをフィレンツェ政府から求められ、この仕事を始めたが病気のため中止し、チェルタルドの隠棲所に戻り、そこで没した。

「デカメロン」には７人の婦人と３人の男が登場する。ペストを避けて荒廃したフィレンツェを捨てて郊外にあるある宮殿に移った彼らは15日間の滞在中、金曜日と土曜日以外の毎日、男３人を含めたこの10人が１日づつ全部で100の物語をすることになった。第１日と第９日には話題は語り手の自由であったが、その他の日には毎日の主題が決められていた。しかし、男の１人ディオネオだけは例外であった。ボッカチオはダンテの「神曲」に対し、この物語を「人曲」と呼ばれるようなものにし、地上における人間のあらゆる面を描き出そうとして、登場人物も教皇、枢機卿、王、諸侯、芸術家、公証人、金貸し、料理人、泥棒などあらゆる階層の人間とした。人生の美しい面を讃歎するかと思えば、多くの場合は醜悪な面を暴露している。とくに好色な面が描かれていることを非難されもしたが、ボッカチオは人間の本能、すなわち

好色、強欲、虚栄、小胆、虚偽などを並べ、人間を客観的に眺め、をれを笑いの対象にした。したがって、この物語には笑いが多いのも特徴といわれる。それはイタリアの市民が中世的束縛から解放され、人間の自由を取り戻しつつある喜びの結果ともいえる。

B.「ボッカチオ」のストーリー

まず登場人物を示すと**表4**のとおりである。序曲に続いて幕が上がる。

表4.「ボッカチオ」の登場人物

ボッカチオ、小説家	Giovanni Boccaccio
ピエトロ、パレルモの王子	Pietro, Prinz von Palermo
スカルッツァ、床屋	Scalza, Barbier
ベアトリーチェ、その女房	Beatrice, sein Weib
ロッテリンギ、桶屋	Lotteringhi, Fassbinder
イサベルラ、その女房	Isabella, sein Weib
ランベルトウッチョ、雑貨商	Lambertuccio, Gewürzkrämer
ペロネルラ、その女房	Peronella, sein Weib
フィアメッタ、雑貨商の養女	Fiametta, beider Ziehtochter
レオネット、学生でボッカチオの友人、そしてベアトリーチェの恋人	Leonetto, Student
ひろめ屋	Ausrufer
ケッコ、乞食の頭領	Checco

{第1幕}

祭日の教会前の広場で、ひろめ屋がボッカチオの最新出版の小説を売っている。女たちはボッカチオの小説を読もうと集まるが、男たちは小説で自分たちの情事が女房にばれるのが厭で、ボッカチオを追放しようと騒いでいる。乞食たちの頭領ケッコの指示によって、それぞれ物乞いが持ち場に着いている。床屋の家で、レオネットが床屋スカルツァの留守に女房ベアトリーチェと密会していると、そこへボッカチオがやってくる。そのとき、旅行中だった床屋の亭主が恋女房に早く会いたくて、予定を変更して帰ってくる。しかし、家のドアが閉まっているので、女房が昼寝でもしているのかと思い、桶屋のロッテリンギと雑貨屋のランベルトウッチョの3人で、ベアトリーチェを起こそうとセレナーデを歌う（図3）。

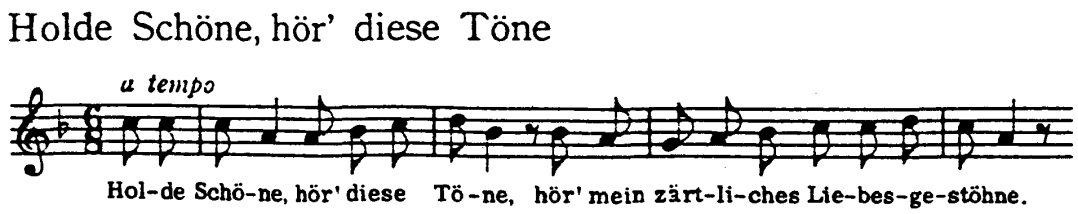


図3.「ボッカチオ」で歌われるアリアと2重唱。
床屋、桶屋、雑貨商がベアトリーチェに歌うセレナーデ

Holde Schöne, hör' diese Töne!	麗しの人よ、聴き給え、
Hör' mein zärtliches Liebesgestöne,	わが優しき愛のうめきを！
Dir, o Süsse, send' ich die Küsse,	愛に燃えるこの接吻を、
Send' ich schmachtende Liebesgrüsse!	やるせなき思いを受け給え！
Mein Gesang, firuliruli, firulirulera,	わが歌はフィルリルリ、
Dieser Klang, firuliruli, firulirlera,	この響きはフィルリルリ、
Sagt dir ja, firuliruli,	あなたに告げるフィルリルリ、
Wer dir nah, firlirula,	誰が近くに来たかをフィルリルリ、
Dein geliebtester Gatte ist da!	あなたの最愛の夫がここにいるのだ！
Dich zu meiden, von dir zu scheiden,	あなたから別れることは
Ach, wie nahe ging das uns beiden!	私たち２人にも辛かった。
Doch zu stehen in deiner Nähen,	だがあなたの近くにいることは
O beglückendes Wiedersehen!	すばらしい再会だ。
Mein Gesang ・・・	我が歌はフィルリルリ・・・

密会中の女房は、これは困った、と一策を弄して「喧嘩だ、喧嘩だ」と大騒ぎを起こし、そのどさくさに紛れてレオネットとボッカチオはうまく逃げてしまう。

鐘が鳴り、人々は教会へ出かけ、雑貨屋のペトロネッラは養女のフィアメッタを連れていく。フィアメッタは実はフィレンツェの公爵の落とし種で、公爵はフィアメッタをパレルモの王子ピエトロに嫁がせようと考えていたが、彼女はそっぽを向いていた。彼女は愛こそ人生で最も大切なものと考えており、ここで有名な「恋は優し、野辺の花よ」と歌う（図４）。

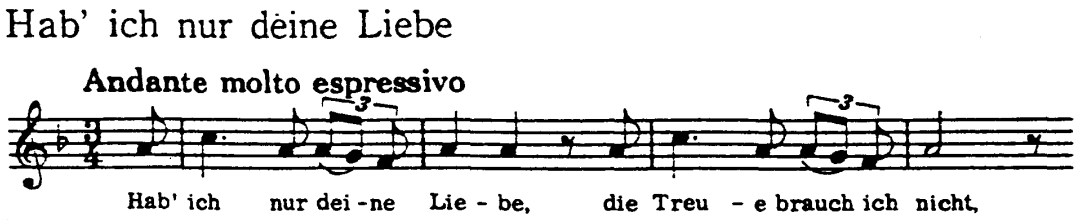


図４．フィアメッタのアリア「恋は優し野辺の花よ」

Hab' ich nur deine Liebe,	あなたが愛して下さるならば、
Die Treue brauch' ich nicht;	貞節を要求しません。
Die Liebe ist die Knospe nur,	愛はただ蕾であって、
Aus der die Treue bricht.	そこから貞節が花となって咲くからです。
Drum sorge für die Knospe,	だから蕾が美しく育つよう、
Dass sie auch schön gedeih',	気を付けましょう。
Auf dass sie sich in voller Pracht	美しく花を開くよう、
Entfalten mag, o gib drauf acht,	気を付けましょう。
Ob mit, ob ohne Treu'!	貞節があろうとなかろうと。

Denn selbst auch ohne Treue	なぜなら貞節のない愛でさえも
Hat Liebe oft entzückt,	人を魅惑するときがあるからです。
Doch ohne Liebe treu allein	でも愛がなくて貞節だけでは
Hat keinen noch beglückt,	だれも幸福にはなれない。
Drum sorge・・・	だから蕾が・・・・

ボッカチオは彼女に一目で恋をし、乞食に変装してフィアメッタ近づくと、彼女もこの乞食に気品があり、彼女に恋していることを見破り、彼に好意を抱く。

フィレンツェにやって来た王子ピエトロは、好色で不道徳な小説を書くボッカチオと間違えられ、町の人々からひどい目に遭う。ボッカチオの小説のなかでさかなにされている男たちにとってボッカチオは目の敵であったが、ピエトロと旅の道連れだったスカルツァが間違いに気がつき、皆でピエトロに謝る。男たちは、ひろめ屋の本を積んだ車をひっくり返し、本を積み上げ、本を焼くことを乞食（実はボッカチオ）に命ずる。こうして、フィレンツェの人々は亭主たち反ボッカチオ派と、女房たちとレオネット、王子ピエトロら親ボッカチオ派、の２つに分かれる。

{第２幕}

亭主が留守中の雑貨屋と桶屋の家の前。王子ピエトロは桶屋の妻イザベッラに恋しており、ボッカチオはフィアメッタに思いを寄せている。妻や養女の監視役は雑貨屋の女房ペトロネッラなので、彼女をレオネット（本当はベアトリーチェの恋人）が誘惑する。そこへ亭主たちが帰ってくる。桶屋をたぶらかして彼を桶の中に入れ、雑貨屋をだましてオリーブの木に登らせたりし、その間にそれぞれが思いを遂げることになる。そこへフィレンツェ公の使いがフィアメッタを迎えにやってくるが、この使いもボッカチオと間違えられて人々にひどい目に遭う。

{第３幕}

フィレンツェ公の宮殿。フィアメッタとピエトロの結婚祝賀会が開かれようとしている。しかし、両者とも心の中で想っている相手は別人である。ボッカチオとフィアメッタは「フィレンツェには美人が多い」とデュエットを歌う（図５）。

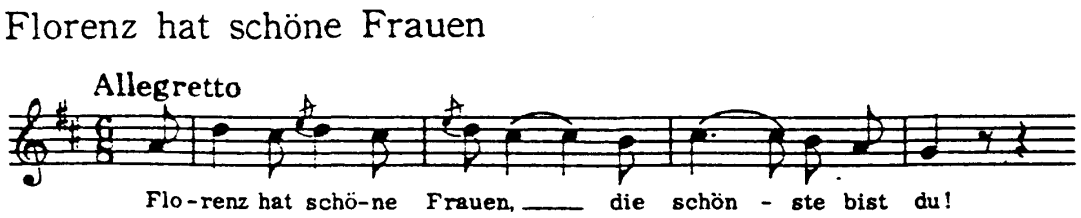


図５．ボッカチオとフィアメッタの２重唱「フィレンツェには美人が多い」。

Florenz hat schöne Frauen,	フィレンツェには美女が多い。
Die schönste bist du,	一番美しいのはあなた。
Doch höhnst du meine Qualen	だがあなたは私の苦しみを嘲り、
Und lächelst dazu.	笑ってばかりいる。

Du kennst night die Liebe,	あなたは愛を知らず、
Verschmachst die sanften Triebe,	この優しい憧れをバカにする。
Nur Spott und kalte Grausamkeit	嘲笑と冷酷さだけが
Sind dir die höchste Lust.	あなたの最高の楽しみだ。
Einst sollst du sehn, was wird gesehen,	いつかあなたにも判るだろう。
Wie der verschmachten Liebe Qual.	嘲られた愛の苦しみが
Die Brust erfüllt mit Wehe,	この胸をどんなに傷つけるかを！
Wie der verschmachten Liebe Qual	嘲られた愛の苦しみが
Mit Weh erfüllt die Brust.	この胸をどんなに傷つけるかを！

こうして、ピエトロはフィアメッタをボッカチオに譲り、ボッカチオを追放しようとしていた町の人々も彼の才能を認め、2人の結婚を祝福することになる（渡辺　護、1974；渡辺忠雄、1990）。

4．「ボッカチオ」の音楽

筆者のもつレコードはボスコフスキーの指揮するバイエルン交響楽団、合唱がバイエルン国立歌劇場合唱団の演奏するもので、その音楽は優雅で美しい。歌い手を**表5**に示す。ボッカチオのプライは貫禄十分の深い美声で、ボッカチオが重厚に思える。ピエトロのブロックマイヤーは王子らしい適役で、フィアメッタのローテンベルガーの歌唱は美しい魅力に満ちている。床屋のベーメはいい味を出しており、桶屋のダラッポッツッァは少々軽い感じ、レンツの雑貨屋は聴かせる。学生のベリーは少々若さに欠けるか。全体としてはいい音楽ができており、演技まで目に浮かぶような演奏で、楽しめる。

表5． レコード「ボッカチオ」の歌い手（EMI, Angel）

役	歌手
Giovanni Boccaccio	Hermann Prey
Pietro	Willi Brokmeier
Scalza	Kurt Böhme
Beatrice	Edda Moser
Lotteringhi	Adolf Dallapozza
Isabella	Kari Lövaas
Lambertuccio	Friedrich Lenz
Peronella	Gisela Litz
Fiametta	Anneliese Rothenberger
Leonetto	Walter Berry
Ausrufer	Bruno Pola
Checco	Günter Wewel

Ⅱ．ミレッカー（Karl Millöcker, 1842-1899）

カール・ミレッカー（Karl Millöcker, 1842-1899）は1842年4月29日、ウィーンの金細工師の息子として生まれ、幼時から音楽の才能を示した。彼は1855年、ウィーン音楽院に入学し、

ピアノ、音楽理論、フルートを学んだ。1858年、ヨーゼフシュタット劇場（Theater in der Josephstadt）楽団のフルート奏者となったが、同劇場指揮者のズッペに認められ、そのすすめで1864年グラーツのターリア劇場（Thalia-Theater）の指揮者になった。間もなく1866年、ウィーンに帰り、アンデアウィーン劇場（Theater an der Wien）の指揮者になった。しかし、同年ハルモニー劇場（Harmonie-Theater）に移った。1868年、ブダペストのドイツ劇場の指揮者になったが、翌1869年にはアンデアウィーン劇場に戻り、1883年まで同劇場で指揮者を勤めた。

ミレッカーは「呪われた城」（Das verwunschene Schloss）、「デュバリー夫人」（Die Dubarry）、「乞食学生」（Der Bettelstudent）、「ガスパローネ」（Gasparone）、「貧しいヨナタン」（Derarme Jonathan）などのオペレッタを作曲したが（Wurz, 1978）、現在は「乞食学生」および「ガスパローネ」、の２つのオペレッタがウィーンの劇場でしばしば演奏される。「デュバリー夫人」の中のアリアには美しいものがあり、現在でも単独で歌われる。例えば、筆者の好きなシュヴァルツコップ（Elisabeth Schwarzkopf）の歌うアリア「私の心を捧げます」（Ich schenk' mein Herz）や「私が人生で始めること」（Was ich im Leben beginne）がある｛Elisabeth Schwarzkopf sings operetta (Angel Records, 35696)｝。はじめの歌の一節は次のとおりである：

・・・・・・・・・・

Ich schenk mein Herz nur einem Mann,	私は彼だけに私の心を捧げます
Dem ich in Liebe gut sein kann,	私は彼のために人生の頂上にいます
Der mich gewinnt, der mich erringt,	彼は私を獲得し、私を抱きます
Der mir zu Füssen liebend sinkt!	私は彼だけに私の心を捧げます
Ich schenk mein Herz nur einem Mann,	私が優しくできる彼こそ私は愛しています
Den ich ersehn, den ich begehr,	彼こそ私が求め、渇望する人です
Ob er nun Knecht oder König wär.	たとえ彼がしもべであっても王であっても

・・・・・・・・・・

ミレッカーの有名な２曲のオペレッタについて述べたい。

A.「乞食学生」

1.「乞食学生」とポーランド

特異な歴史を持つポーランドについてはのちに再び触れるが、「乞食学生」はヴワディスワフ１世がポーランド王となり国家を統一する前のザクセン選帝候アウグスト２世（August II、アウグスト強力王：August der Starke）がポーランド王であった時代の話である。1704年、スタニスラフ・レシュチンスキー（Stanislaw Leszczynski）がスウェーデンの支援のもとにポーランド王となったので、アウグスト２世はポーランド王位を放棄したが、ロシア軍がスウェーデン軍を破り（ポルタヴァ{Poltava}の戦い、1709）、1710年、再び王位に復帰した。このアウグスト強力王はドレスデンにヴェルサイユ宮殿を模したバロック様式の「ツヴィンガー宮殿」（Zwinger）を造るなど、ドレスデンを中心とするザクセンの発展に偉大な寄与をした（図６）。

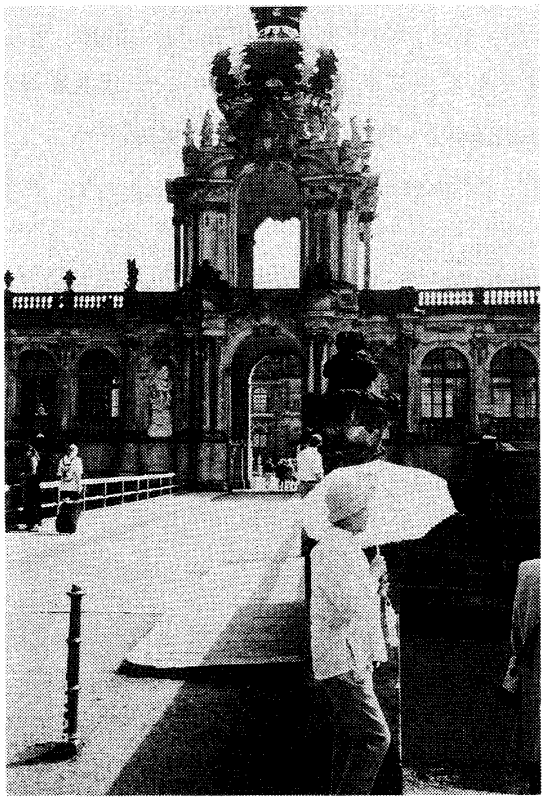


図6．ドレスデン・ツヴィンガー宮殿への門（筆者写す）。

1995年９月、筆者は長くポーランドの首都であったクラコフを訪ねる機会を得た。この時の旅日記の一部には以下のように書いてある：

”９月４日　晴れときどき曇り、小雨あり。KatowiceからKrakowへ

昨日Zygmunt（註１）の経験をいろいろ聞く。戦争中ドイツによってかなりひどい目に遭ったとのこと。彼が10歳の時、銀行家だった父がドイツ軍に殺された。Poland式朝食（生ハム、チーズ、パン、紅茶）のあとZygmuntと車でKrakowへ。11：30頃に着いたが途中迷う。駐車しておいてホテル "Saski"へ行く。207号室だがbathroomがない。しかしOK。２人で出て町を歩く。大変古い町だ。Markt, St. Maria教会、etc.を見て、昼食のため地下の "Taverna"（註２）へ行く。PolandのBigos（肉、ソーセージ、ベーコン、乾しキノコ酢漬けキャベツの煮物）などを食べる。昼食後大学を訪ねる（註３）。昼食後Markt付近、城門（註４、図７）あたりを歩く。有名なCafeへ行ってcoffee ice creamで一休みする。彼はManoveの別宅へ行く。ホテルへ帰り、隣の中華料理店でソバの夕食をし、洗濯、シャワーを浴びる。忙しい１日だった。

９月15日　曇り、少し寒い。KrakowからAuschwitzを経てKatowiceへ

夜中じゅう若者グループが路上で大声でわめき、やかましいことこの上なし。昨日食べ過ぎて胃が重く、夜半まで気分が悪かった。朝方漸く回復したので惰眠を貪る。朝食はどうしようかと思ったが、食べることにする。バムエッグは小さな鍋（直径15cm）ごと出す。Brotchen２個、グレープフルーツジュース、紅茶で10ZtNと高いような安いような。この "Saski" ホテルは66ZtN（約7,500円）とまずまずだ。Zygmuntは10時より遅れて来る。２人で城の方に登り、Wawel城(註５）のDomに行き、地下で歴代王の墓を見る。塔に登ってKrakowの町を眺めいい

気分である。下りると、そこへポーランド大統領のWalesaが来、目の前を愛想を振りまいて通る。思ったより背の低い男である。ジグムントは、ワレサは選挙運動に来たのだろうと言う。Krakowに別れを告げ、Auschwitzへ向かう。途中、百姓家のレストランでポーランド式昼食。Kirupnik（オオムギスープ）とSzasziryk（肉の串焼き）だった。アウシュヴィッツへ到達（以下省略）"

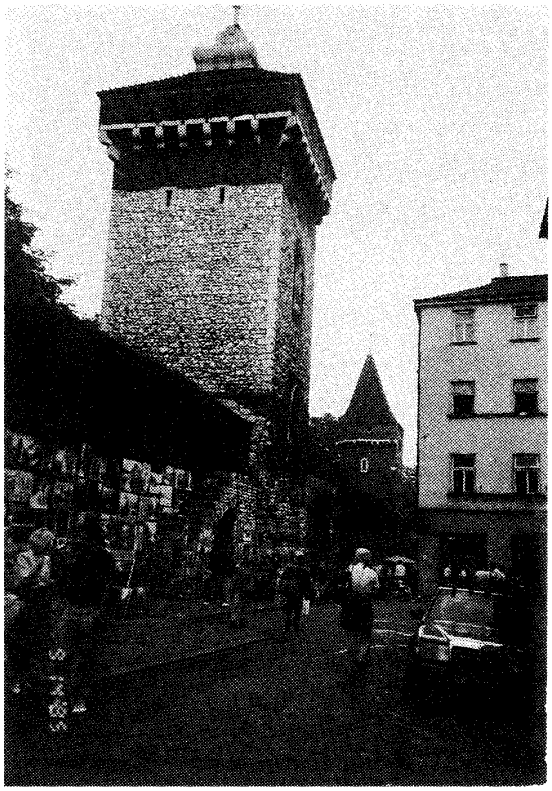


図7．クラコフの城門（筆者写す）。

（註1：Zygmunt Hejnowicz:筆者の研究上の友人で、カトヴィッツのUniversity of Silesia教授; 註2：ヤマ・ミハーリカ {Jama Michalika} 19世紀末に芸術家が集まったクラコフでは有名な所；註3：ヤギエウオ大学 {Universytet Jagiellonski}、1364年創設で、東ヨーロッパではプラハ大学に次いで古い。コペルニクスが学んだ；註4：フロリアンスカ門 {Brama Florianska} 図7，13－15世紀建造の城壁の北側の門；註5：16世紀に築かれたポーランド歴代王の居城で {Zamek Wawelski}、ポーランド一の美しいゴシックールネサンス様式の城と言われる）

このオペレッタは、ポーランド人のザクセン支配に対する抵抗を取り扱った物語を題材にしており、学生を装う主人公ヤン（Jan）は実はレシュチンスキーの士官オパリンスキー（Opalinski）である。

前報（増田芳雄、1999）で述べたように、ウィーンの2人の人気台本作家ツェルとジュネー2つの台本を用意した。一つは「乞食学生」、もう一つは「ヴェネチアの一夜」である。ミレッカーが「乞食学生」を選んだので、年長のヨハン・シュトラウスは「ヴェネチアの一夜」を作曲したのだという。「ヴェネチアの一夜」はシュトラウスのオペレッタのなかではまずまずの成功を納めたが、ミレッカーの「乞食学生」は空前の大成功をおさめた（図8）。

図8.「乞食学生」の切手、1：50シリング

2.「乞食学生」のストーリー

主な登場人物を表6に示す。また、表7にピアノ・スコアによる曲番号を示したので、これに従ってストーリーを説明したい。

{第1幕}

牢獄の中庭に女たちが集まり、ザクセンに抵抗し、政治犯として収監されている彼女らの夫たちに面会指せよと求めている。看守のエンテリヒは少々鈍いくせにこすいところもあるが、人は良く（シュトラウスの「こうもり」の牢番フロッシュに対応)、賄賂をもらい、こっそりと夫たちを妻たちに会わせるようにする(1)。そこへクラコフの司政長官オレンドルフがやってくる、という報せが来たので囚人たちを急いで牢獄に追い返す（1−1/2)。

オレンドルフがやって来たのは牢獄の様子を視察に来たのではなく、別の私的な目的であった(2)。先日の夜、伯爵夫人の娘ラウラに懸想しているオレンドルフは彼女に肩越しに接吻しようとして扇子で叩かれ、恥をかかされた。その仕返しをしようというわけである。ここで有名なワルツが歌われる（図9）：

表6.「乞食学生」の主な登場人物

Palmatica Gräfin Nowalska	パルマティカの伯爵夫人ノヴァルスカ
Lauta, deren Tochter	ラウラ、その娘
Bronislawa, deren Tochter	ブロニスァヴァ、その娘
Oberst Ollendorf, Gouverneur von Krakau	オレンドルフ、クラコフの司令官
Jan Janicki, Student der Universität in Krakau	ヤン、クラコフ大学の学生
Symon, " "	シモン、同上
Der Bürgermeister von Krakau	クラコフの市長
Entrich, Kerkermeister	エントリヒ、牢獄看守長

表7．「乞食学生」の曲番号（Cranzのピアノ・スコアから）

Introduction	序曲
Ⅰ. Akt	〖第1幕〗
1. Introduction	導入部
2. Auftritt Ollendorfs	オレンドルフの登場
3. Auftritts - Duo	2重唱
4. Chor und Ensemble	合唱とアンサンブル
5. Auftritt - Terzetto-- Walzer	4重唱、ワルツ
6. Ensemble und Lied	アンサンブルとリート
7. Finale	フィナーレ
Ⅱ. Akt	〖第2幕〗
8. Terzetto	4重唱
9. Duett	2重唱
10. Duett	2重唱
11. Ensemble	アンサンブル
12. Couplet	クープレ
13. Finale -- Rundgesang	フィナーレ
Ⅲ. Akt	〖第3幕〗
14. Entreact - Couplet	クープレ
15. Introduction	導入
16. Couplet	クープレ
17. Ensemble	アンサンブル
18. Schluss	終幕

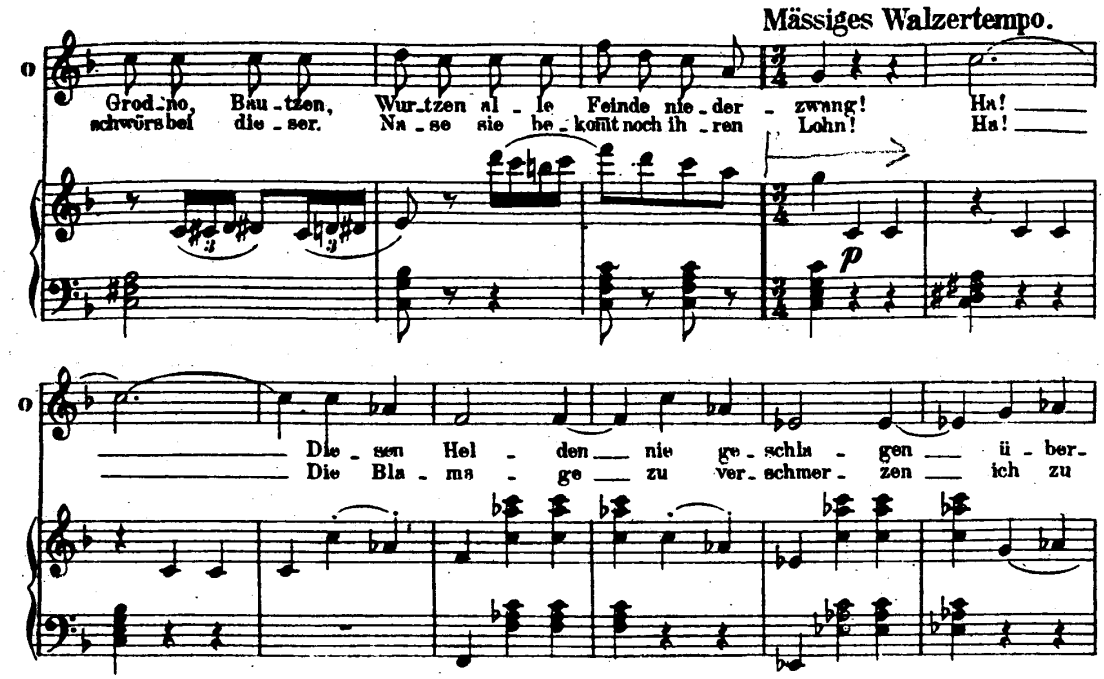


図9．「乞食学生」第1幕、オレンドルフのワルツ（Edition Cranzのピアノ・スコアまら）。

(Ollendorf)

Diesen Helden, nie geschlagen,	この偉大な俺様が殴られるなんて
Überall hochverehrt	どこへ行っても尊敬されているこの俺様が
Dürft' ein Weib zu schlagen wagen-	こともあろうに女に殴られるなんて
Der Gedanke mich empört!	思い出すだけでも腹が立つ！
Die Erinnerung macht mich beben,	思いだすだけでも身が震えるほど癪だ
Mich so tätlich zu insultieren;	俺様に対するあんあ侮辱はない：
Doch soll sie etwas von mir erleben,	彼女は俺様の報いを受けなくてはならない
Meine Rache spüren!	俺様の復讐だ！
Wer es denn eigentlich	他ならぬ彼女こそが
Gar so fürchterlich,	恐ろしい復讐を受けなくてはならない、
Warum ich so schwer gebüsst" Ha!	必ず償いをさせてやるぞ！
Ach ich hab' sie ja nur	彼女の肩越しに
Auf die Schulter geküsst!	ちょっと接吻をしようとしただけなのに
Hier hab' ich den Patsch verspürt	扇子で俺様の顔を
Mit dem Fächer ins Gesicht!	ひっしゃと叩きおった！
Aber so etwas noch nicht!	それ以上何もしなかったのに！

落ちぶれた伯爵夫人がオレンドルフとザクセンの兵士たちをからかい、ポーランドの王子だけがラウラに相応しいと言ったのであった。そこでオレンドルフはラウラと彼女の一家を侮辱しようと考え、囚人のなかから乞食学生シモンをヴィビッキー皇太子（Prinz Wibicki）と称し、立派な服装をさせて牢獄から出す。さらにもう一人の政治犯ヤンも従者としてシモンと共に釈放する(3)。ヤンはポーランドをザクセンから解放しようという目的を持っている(4)。クラコフの祭りに伯爵夫人が2人の娘と登場し、買い物をしようと楽しんでいる(5)。ここで策略をもったオレンドルフはシモンを伯爵夫人母娘に富裕な王子として紹介する(6)。シモンはラウラに魅せられる。伯爵夫人はシモンを気に入り、彼を娘の婿にしたいと願う。他方、従者のヤンはラウラの妹ブロニスァヴァと恋に陥る。こうしてフィナーレとなる(7)。

{第2幕}

シモンとラウラの結婚式の準備が行われる(8)。もともと牢獄から解放されるためにオレンドルフの奸計に乗ってこの茶番劇に応じたシモンは、実は本当にラウラを愛していることを自覚し、この茶番を続けることを躊躇する。そこで、彼はラウラの本当のことを手紙に書いて知らせる。オレンドルフは彼の手紙のことを知り、その手紙がラウラに届かぬよう策する。シモンは、ラウラも彼を愛しているので、彼の身分が低くても自分と結婚しようと望んでいると考え、結婚式が行われることになる。他方、ヤンはブロニスァヴァとの真剣な、そして秘密の恋をお互いに確か合う(9)。シモンもラウラとの愛を確かめ合う(10)。人々もシモンとラウラの結婚を喜ぶ(11)。しかし、オレンドルフは失意をかこつ(12)。こうしている間に、ポーランド人のリーダーであるアダム公爵に率いられた革命軍の勝利が近づいている。

アダム公爵がノヴァルスカ城の伯爵夫人の夫人のもとに変装して逗留していることを知ったオレンドルフは、召使いをしているヤンに公爵のスパイをするよう命ずる。そうしたら報酬として20万ターラーの金を与える、と言う。ヤンは承知したふりをするが、それはこの金が牢獄の所長に対する賄賂として役に立つと考えたからである。シモンとラウラの結婚式が進行するが、オレンドルフは意気揚々としている。それは、エントリヒや囚人たちがシモンを乞食学生の囚人仲間だと歓迎したからである。ラウラは侮辱され、結婚式に参列した人々は去り、シモンは追放される。オレンドルフの作戦は成功したかのように見えた(13)。

{第3幕}

ノヴァルスカ城の庭でヤンはシモンに会い、一計を案ずる(14, 15)。シモンはアダム公爵としてオレンドルフの許へ行き、ヤンが20万ターラーの金を受け取る(16)。オレンドルフはこのシモン扮する公爵を収監する。そこへラウラが来て、過去のいきさつにもかかわらず今やシモンを心から愛し、オレンドルフに慈悲を願う。

大砲が轟き、ポーランド人の反乱が報ぜられる。しかし、公爵を手元に監禁していると考えているオレンドルフは自分の安全を信じている。そこへ本物の公爵が進軍してやってくるが、彼こそ紛れもなくヤンその人であった。ヤン（アダム公爵）はシモンを伯爵に任じたので、シモンはラウラと釣り合う相手となる。公爵は伯爵夫人にシモン伯爵とラウラの結婚を申し入れ、オレンドルフを夫人の個人的な捕虜とするよう宣告する(17)。こうして、3組のカプルが出来、ポーランドの明るい将来が約束される(18)。

3.「乞食学生」の音楽とウィーンで人気のある理由

筆者はウィーン・フォルクスオーパー劇場でこのオペレッタを2回観る機会を得た。また、全曲レコードを1種類所持している(**表8**)。フォルクスオーパの上演では、ホルツマイヤー、ミニヒ、クレンマー、デンヒら同劇場の看板歌手が活躍している。この日ボンにおける会議の後、妻とローザンヌ、ブダペストと回り、12月13日に列車でウィーンに着いた夕方、フォルクスオーパーで「乞食学生」を観た。筆者の旅行日記にはただ、“K.DönchがEntrichと豪華な歌い手、全体として皆美声である。”と記してある。

例によって、アラーズのレコードでは舞台では見られない豪華な顔ぶれが揃っている。すなわち、シュトライヒ、プライ、ホルム、ゲッダらが競って美声を披露している。オペレッタに手慣れた歌い手たちであるこれらの歌手については前報、前々報（増田芳雄、1998, 1999）で述べた。

このような政治的歴史的出来事を主題にしたオペレッタがウィーンで人気があるのはなぜであろうか。筆者の解釈は次のとおりである。ポーランドを巡ってオーストリアはザクセンおよびその同盟邦であるプロイセンと仇敵の間柄であった。したがって、ポーランドがザクセンの圧制を打ち破る、というこのオペレッタはウィーンの市民に快哉を叫ばし、現在でもその感情が残っているのではなかろうか。このことを知るためにポーランドの歴史をもう少し見てみたい（この部分は次の文献を参考にした。山本俊朗・井内敏夫、1980；工藤幸雄、1980；新編西洋史辞典、1983)。

表8.「乞食学生」の演奏

	フォルクスオーパー 1976年9月9日	レコード 1990年12月13日	
指揮者	Franz Bauer-theussl	Konrad Leitner	Franz Allers
Orchester	Volksoper	Volksoper	Symphonie-Orchester Graunke
Gräfin Nowalska	Sonja Mottl-Preger	Anny Schlemm	Gisela Litz
Laura	Sylvia Holzmayer	Milena Rudiferia	Rita Streich
Bronislawa	Manique Lobasa	Ildiko Raimondi	Renate Holm
Ollendorf	Herbert Prikopa	Hans Krämmer	Hermann Prey
Symon	Peter Minich	Kurt Schreibmayer	Nicolai Gedda
Herzog Adam (Jan)	Rudolf Katzboeck	Josef Luftensteiner	Gerhard Unger
Entrich	Hans Krämmer	Karl Dönch	Karl H. Bennert

{10世紀後半} バルチック海に注ぐヴィスワ（ヴィスラ、Wisla）川と西のオーデル（Oder）川の間に統一国家が成立した。国名ポルスカ（Polska）は統一を推進したポラーニ（Polani、平原の民）に由来する。

{12—14世紀} 国家は分裂状態となったため中央集権が失われ、外敵に侵略されやすくなった。最大の危険な勢力は、第3次十字軍遠征の際に設立されたドイツ騎士団であった。しかし、原始宗教を奉ずる大国リトアニア（Lithuania）にキリスト教を布教しようとこの大公国を狙ったドイツ騎士団に対抗するため、ポーランドはリトアニアと合同した。

{15世紀} ヴワディスワフ（ヤギウウオ、Wladyslaw）指揮のポーランド・リトアニア連合軍がドイツ騎士団に大勝し、ドイツの東方への進出を止めた（1310年7月15日）。ドイツ騎士団はこうして、ポーランド王ヴワディスワフ2世を封主として、ルター主義を信奉する世俗のプロイセン（Preussen）公国となった。

{16世紀} 国家は親ハプスブルクと反ハプスブルクの両派に分裂し、2人の国王が出現した。一人はヴワディスワフの血脈をひくスウェーデンの王子ジグムント（Zygmunt I）で、他はハプスブルク家のマキシミリアン（Maximilian）大公であった。しかし、大公側が敗れ、ポーランドはスウェーデンとの間に王朝合同が成立した。

{16世紀末—17世紀初め} 反宗教革命が起こり、大貴族の多数がカトリックに再帰依し、このため王と大貴族が対立するに至る。そしてスウェーデンと戦うのみならず、タタールやコザークが反乱を起こし、国家は疲弊し始めた。ドニエプル左岸をロシアに編入しようとする争いをめぐり、ポーランドはロシアと戦争になった。17世紀半ばのスウェーデンとロシアの侵略を大洪水と呼ぶ。しかし、ポーランドはこの時期まだ有力な国家で、1683年、オスマントルコがウィーンを包囲したとき（第1次ウィーン包囲）、キリスト教を救うため、ポーランド王ヤン3世（Jan III;ソビエスキー、Sobieski）がトルコを破り、ウィーンは救われた。このヤン3世のあとポーランドは衰退の途を辿った。

{17—18世紀} ヤン3世の死後王位をついだのはザクセン（Sachsen）選帝侯（Kurfürst*）アウグスト2世（August II, August der Starke）で、彼はポーランド王となるため、ルター

派からカトリックに改宗した。

［＊ドイツ國王を選挙する権利を持った諸侯で、一群の有力な世俗諸侯に限定され、世襲制をとっていた。マインツ、ケルン、トリアーの３大司教と、ラインプファルツ伯、ザクセン公、ブランデンブルク辺境伯の３諸侯であったが、」1290年にボヘミア王が加わって７名となった。17世紀以降は選帝候制度は崩れ、1806年、ナポレオンによって神聖ローマ帝国が崩壊した後は選帝候の名称は有名無実となった］

アウグスト王の治下、トルコからウクライナなどを奪回した。実はポーランドは中立を宣言していたが、王はロシアのピヨートル大帝（Pyotr I）と協定を結び、対スウェーデンの北方戦争に参加した。このため、スウェーデン軍が領内に攻め入った。これらの状況からアウグスト２世の支持派と反対派が対立し、スウェーデンの支持でレシチンスキー（Stanislaw Leszczynski）が王となった（1704－09）。「乞食学生」の背景はこの時期のことである。しかし、北方戦争のポルタヴァ（Poltava）の戦で1709年、ロシアがスウェーデンを破り、このためアウグスト強力王が再度王座に就いた。強力王のあとはアウグスト３世が継いだ。

{18世紀} スペイン継承戦争後、オーストリアはマドリードを放棄し、バルカンへ進出を計りはじめた。継承戦争の功により1701年に王国になったプロイセンはフリートリヒ大王の富国強兵策によって勢力を伸ばし始め、18世紀半ばのオーストリア継承戦争（1740－48）と七年戦争（1756－63）でプロイセンはオーストリアからシレジア（Schlesien）を奪った。このような情勢下で列強はポーランドを狙い、とくにプロイセンがポーランドの分割を欲した。その結果、ポーランドの分割は第１次（1772、ロシア、プロイセン、オーストリア）、第２次（1793、ロシア、プロイセン）、そして第３次（1795、ロシア、プロイセン、オーストリア）と起こり、ついにポーランドは滅亡するに至った。さらにナポレオン後のウィーン会議（1814－15）によって第４次分割が行われた。しかし、1846年にはクラコフの蜂起がおこるなど、ポーランドの愛国的運動はその後も続いた。

{20世紀} 第１次世界大戦によって独立を回復したが、第２次世界大戦でナチスに攻略され、終戦によってドイツから解放された。

「乞食学生」に登場するザクセンについて付け加えておきたい。ザクセン公国はエルベ川下流に居住していたゲルマンの一支族であるザクセン人が中部ドイツに移住して部族公国を造ったのが始まりという。８世紀にフランクのカール大帝（Karl der Gross）の支配下に入り、キリスト教を受容した。10－11世紀にはドイツ国王位を占めたが、一時期没落し、金印勅書により14世紀には選帝候位を得た。新興のプロイセンよりははるかに古い王国で、ザクセンはドイツにおける名家といえよう。

ポーランドは再三にわたる分割でロシアにはたびたび侵略、略奪されるという歴史を持っているためか、日露戦争には甚だしい関心を示したという（山本俊朗・井内敏夫、1980）。その例として次のような挿話がある（増田芳雄、2000）。奉天会戦においてロシア軍を破った日本軍の司令官の一人、黒木将軍はもともとポーランド人である、という記事が1905年、ドイツの新聞に掲載された。大山総司令官もフィンランド人であった、と同記事に書かれている。それほどポーランドやフィンランドはロシアから圧迫、侵略されていたので、その恨みを晴らすた

め、大国ロシアに対して敢然と戦った日本軍を助けたと思ったのであろう。ロシアによるポーランド迫害の最近の例としては“カチンの森の虐殺”（The Katyn Forest Massacre）がアメリカ政府に保管されていた秘密文書によって明らかにされた（NHKテレビ、1990年7月2日；増田芳雄、1996）。これによると、1939年ポーランドに侵攻したソ連軍はポーランド人を強制収容所へ移送し、翌年春、将校1,5000人をいずれかへ連れ去った。1942年、ドイツ軍に占領されたソ連西部のカチンの森で約5000人のポーランド将校の虐殺死体が発見された。これはソ連によるものであったことが調査の結果判明した。残りの1万人の行方は不明であったが、ポーランドはその後少なくとも2－3ケ所のカチンの森と同様の場所が発見されたと発表した。しかも英米側は、同盟国ソ連の犯罪をドイツになすりつけるため、ソ連が虐殺をしたという事実を隠蔽することに手を貸したというまぎれもない事実が判明した。ポーランドの人たちが長くロシアからの侵略に苦しんだことはその苦難の歴史が示している。

これに対し、オーストリアのハプスブルクは常にヨーロッパにおける主導的地位を占め、ドイツ、ロシア、フランスと肩を並べていたが、オーストリアが分割で得た領土の人民に対しては母国語の使用を許したという。ポーランドとそのポーランドにおける権益はマリア・テレジアの継承戦争の際、フリートリヒ大王のプロイセンに屈し、シレジアを奪われるに至った。以後、何かにつけオーストリアはプロイセンの後塵を拝し、1866年にはドイツ統一の主導権争いとも言うべき普墺戦争に敗北するに至った。こうしてザクセンを含むドイツの統一は1971年行われ、第2帝政が完成した。さらに、第1次世界大戦ではオーストリアはドイツと同盟して戦った結果、敗戦の憂き目を見、1938年にはヒトラーの第3帝国によって併合されるに至った。

このミレッカーのオペレッタは、ヨハン・シュトラウスのオペレッタと比べると、音楽的にはもう一つ、と筆者には感じられるが、ウィーンの人たちはシュトラウスのそれと同様にこのオペレッタを好んでいる。上に述べたように、オーストリアはことごとにザクセン、プロイセンを含むドイツに憂き目を与えられてきた。それが、「乞食学生」でザクセンを放逐してポーランド王を回復する、という物語のオペレッタに人気が衰えぬ原因ではなかろうか。

B.「ガスパローネ」

ミレッカーのもう一つの人気のあるオペレッタ「ガスパローネ」も政治あるいは社会がらみの話であり、いわゆる“盗賊”ものである。1869年、パリで初演されたオッフェンバックの「盗賊」（Die Banditen）の人気はやはり盗賊を扱ったこのミレッカーの「ガスパローネ」に王座を譲ったと言われる。「ガスパローネ」は1884年1月26日、ウィーンのアンデアウィーン劇場で初演された。台本は例によってツェルとジェニーによっている。有名な指揮者ハンス・フォン・ビューロー（Hans von Bülow）＊は“ミレッカーに、”君はいい調べを書いた”と最大の賞賛を贈ったと言われる（Scherle, 1982）。このことも「ガスパローネ」の人気のもとになったようである。

（＊ベルリンフィルハーモニーの指揮者で、彼の妻はフランツ・リスト｛Franz Liszt｝の娘コジマ｛Cosima｝であった。コジマはバイエルン州でルートウィッヒ2世｛Ludwig II｝の庇護を受けていた作曲家リヒャルト・ワーグナ｛Richard Wagner｝の許に走り、のちにバイロイ

ト｛Beyreuth｝音楽祭の基礎を築いた。このような状況にもかかわらず、ビューローはワーグナーの曲を演奏し続けた｛清水多吉、1980｝）

1.「ガスパローネ」の由来

1830年2月2日付けの「ウィーン新聞」（Wiener Zeitschrift）に“ガスパローネと呼ぶ盗賊の首領がローマの監獄に収監されている。彼は243人を殺害したが、そのうち105人については自白しており、その罪を問われている。”という記事が出たという（Scherle, 1982）。この記事によると、“ガスパローネの顔は残忍な表情で、両眼はくぼんで寄っており、鋭く悪意に満ちているが、同時に臆病である。鼻は長く、口にまで下がっている。その口は唇が薄く、両端は上に向いている。髪は黒く、短く縮れていないが、額ははげ上がっている。背は高いが、前屈み気味で卑屈な、そして人見知りする様子である。彼は42歳で、殺人の黄金国（Eldorado）ヴォルスカー（Volsker-Gebirge）山（カザフスタンに近いロシア領か）の出身である。”とある。

このガスパローネは伝説的人物として作家たちの興味を惹き、1835年以後、ウィーンでは多くの盗賊を主題にした劇やパロディーが造られた。それまでは、盗賊モーア（Karl Moor）を取り上げたシラー（Schiller）の戯曲「泥棒」（Die Räuber）は18世紀におけるもっとも人気のあったものだったという。これにヴェルディ（Verdi）が作曲してオペラを作ったが、成功しなかった。19世紀に至り、泥棒ものオペラやオペラ・コミックが流行、オッフェンバックに至ったのであろう。ミレッカーは「ガスパローネ」に美しい曲を付けたが、その幾つかを以下に紹介したい。しかし、前報の「ヴェネチアの一夜」と同様（増田芳雄、1999）、この「ガスパローネ」もツェルとジェニーの台本であるが（Wurz, 1969; Schneidereit, 1981）、その登場人物、役柄、舞台等は改変を何度か受けており、話は複雑である。1931年に至り「ガスパローネ」は作曲者シュテファンとクネプラー（Ernst Steffan、Paul Knepler）によって改変されたが、それにより舞台がシシリー島（Sicily）のシラクサ（Syracuse）から他の場所に変わり、台本もそれぞれ改変されている。オリジナルはシラクサ（Wurz, 1965; Schneidereit, 1981）であるが、全曲レコードではトラパニ（Trapani）に変わり、人物の一部が変わった。筆者は1981年10月25日、ウィーンのフォルクスオーパでこのオペレッタを観る機会を得たが、この時の「ガスパローネ」の舞台はシラクサでもトラパニでもなく、イタリー半島の先、シシリー島の向かいあたりのピツォラート（Pizzolato）であった。また、後述の全曲レコードを所持しているが、これらはリヒャルト・バール（Richard Bars）のテキスト、パウル・ブルクハルト（Paul Burkhard）の音楽改変によるピアノ・スコアとは異なり、上述のシュテファンとクネプラーによる改変によっている。このオペレッタがたびたび手を加えられて今日に至ったことが判る。この意味では前報の「ヴェネチアの一夜」よりも改変が甚だしい。

2.「ガスパローネ」のストーリー

登場人物は**表9**に示すように、それぞれ改変がある。筆者の手元にあるフォルクスオーパーの演奏、レコード、ピアノ・スコア、それに文献を表9で比較しておきたい。時は1820年、シシリー島のトラーパニ。

表9.「ガスパローネ」の登場人物。

	フォルクオーパー	レコード	ピアノ・スコア	文献1	文献2
Text	原：Zell,Genee	Steffan, Knepler			
場所	Pizzolato	Trapani	Syrakus	Syrakus	Syrakus
人物					
Carlotta:	伯爵夫人	"	"	"	"
Nasoni:	市長	"	"	"	"
Sindulfo:	市長の息子、警察署長	"	"	"	"
Der Fremde	見知らぬ人	"			
Benozzo:	密輸団の親方		居酒屋の主人		
Sora:	ベノッツォの妻	"	"		
Massaccio	居酒屋の亭主		密輸団の親方		
Luigi			見知らぬ人の友		

前奏曲に続き、

{第1幕}

シシリー島のピッツォラート（Pizzolato）郊外のマッサッチオの旅篭屋で、チュニスから到着する筈の密輸品を、ベノッツォとその従兄弟のマサッチオをリーダーとする密輸団漁夫達が待っている(1)。船が到着し、密輸品、砂糖、コーヒーが旅篭屋の地下へ運ばれる。この密輸は警察の邪魔を受けることなく成功するが、それはベノッツォが次のような布告をしたからである。すなわち、大盗賊ガスパローネがシシリー島へやって来た、と。市長のナゾーニは“いまいましい盗賊のガスパローネめ”と歌う(2)市長の少々鈍い息子で警察署長のシンドゥルフォに率いられた警官隊はつまらぬ仕事をしている。密輸はうまく行っても伯爵夫人のメイドであるソーラとの結婚生活はうまく行かないのは、ベノッツォが密輸の仕事で家をしょっちゅう空けるからで、ソーラは嫉妬し、つむじを曲げている。それは、亭主のベノッツォが密輸のために留守をするということを彼女に説明しないからである。こうして平和な村は突然の見知らぬ旅人の出現で壊される。この旅人がガスパローネであるという噂は忽ち拡がる。実はこの旅人は総督で、供のルイジを連れてこの町の不正を調べにやって来たのであった。彼はすでに旅篭屋の中の陰謀を立ち聞きして知っていたのであった。未亡人となった伯爵夫人カルロッタを森の中で盗賊の一団（実はマサッチオの仲間）が襲うが、この旅人がカルロッタを救い、彼女は無事に戻り、“面白い冒険だった”と歌う(3)。市長ナゾーニも旅人がガスパローネだはないかと疑うが、現れた旅人は「エルミニオ」（Erminio）というパスポートを市長に見せる。市長が旅人の存在を喜んでいなかったのは、旅人がカルロッタに関心を示していたからである。“自分が盗賊であったらいいのだが”と歌って(4、図10)息子のシドゥルフォと婚約しているカルロッタに歌う(5)。

Oh, dass ich doch der Räuber wäre,
ich schwör' es Euch, es ist kein Scherz-
Kein Geld begehrte ich auf Ehre,
was ich mir nähme wär' das Herz!

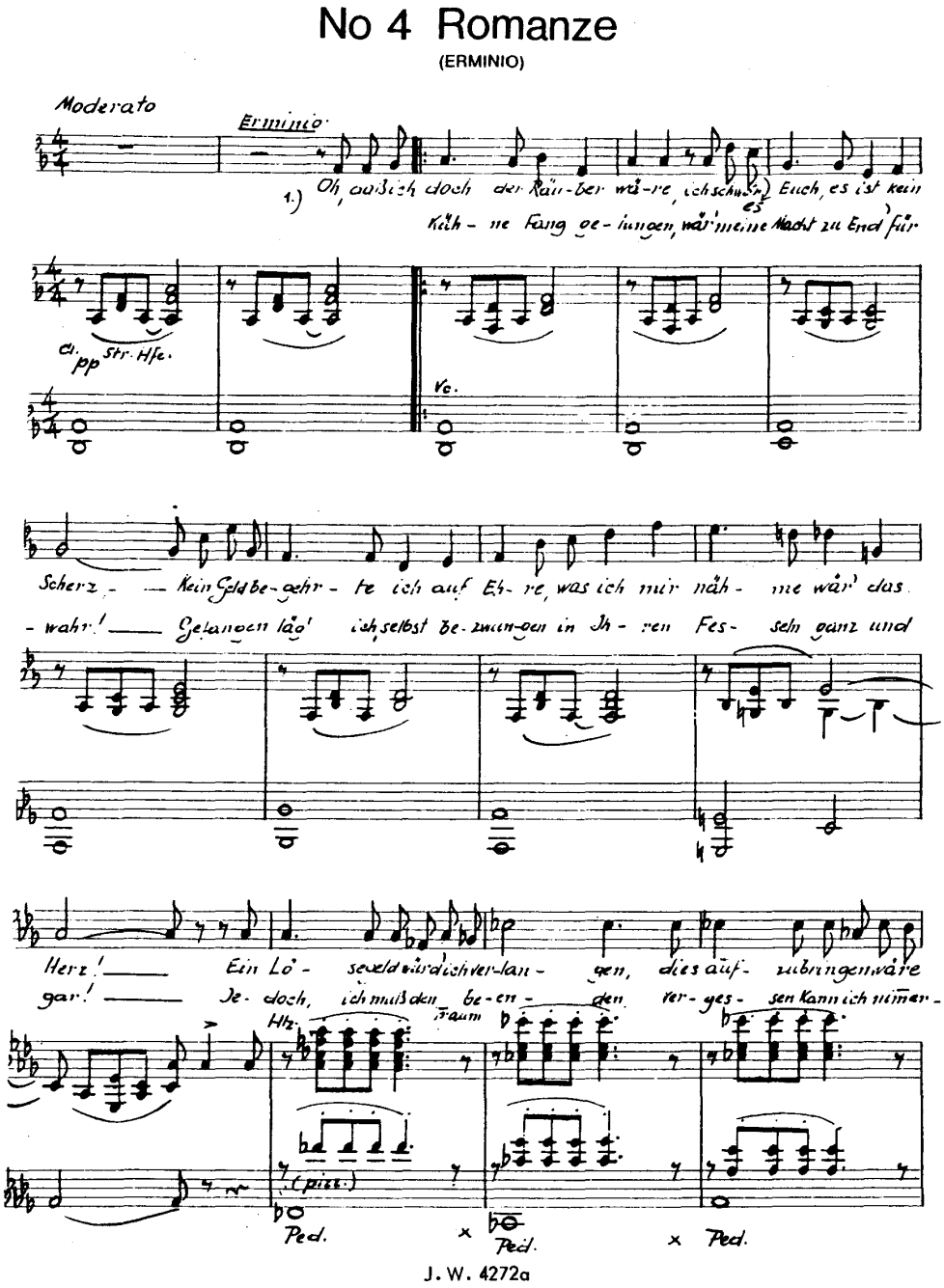
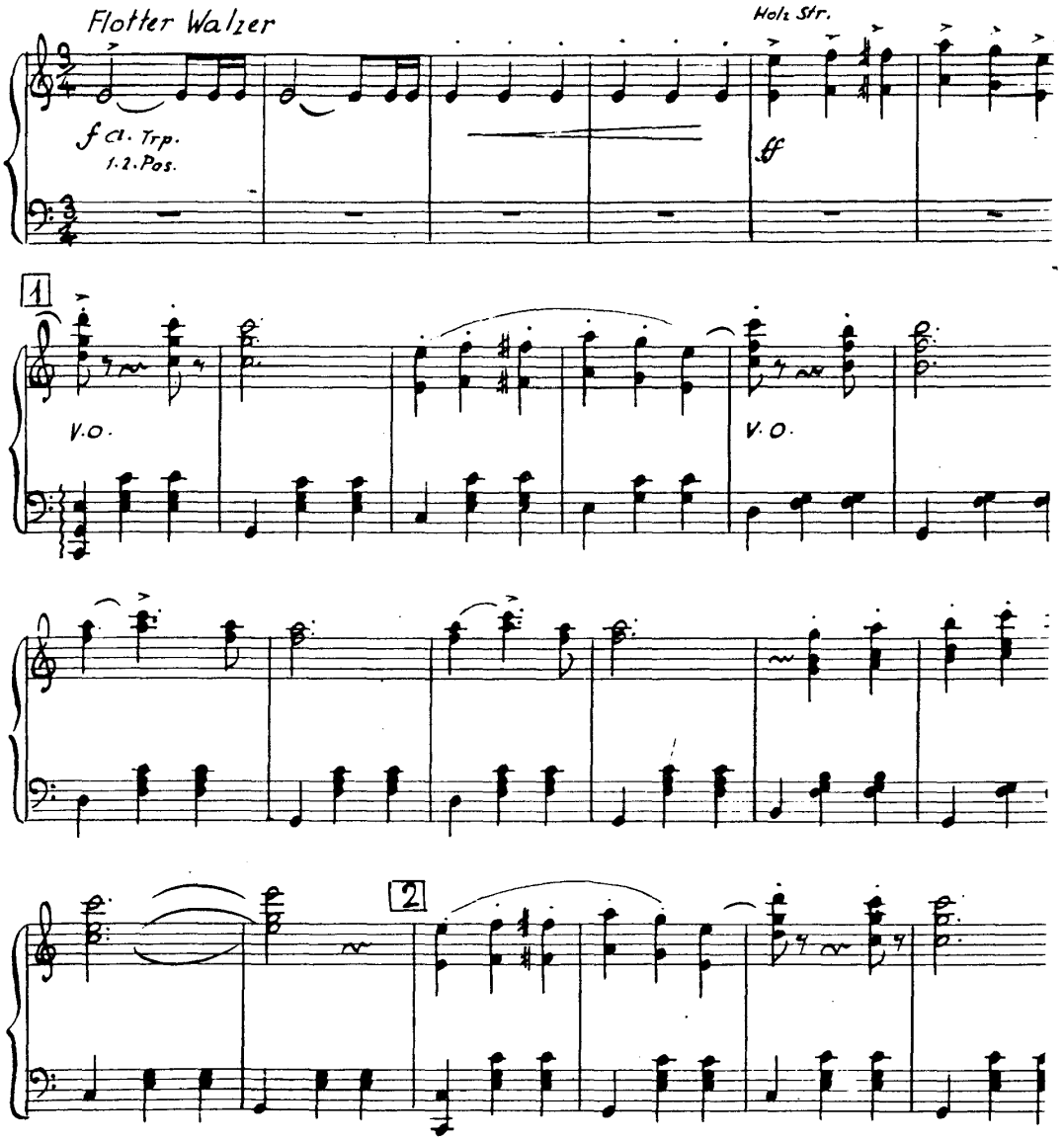


図10.「ガスパローネ」で旅人によって歌われるロマンス（ピアノ・スコアから）。

市長ナゾーニは正直を装いながら実は厚顔無恥の人物で、カルロッタに謀略を巡らせていた。すなわち、古い法律により、サンタ・クローチェ（カルロッタの一族）の財産はとくに遺言がなければピッツォラートの修道院のものになる、というものであった。サンタ・クローチェの先代領主であったカルロッタの叔母は事実遺言を残していなかった。しかし実は、ナゾーニが遺言を隠していたのであった。彼の計画は、適当な時期に息子のシンドウルフォが遺言を発見し、とれをカルロッタへの愛の証と使用というものであった。踊り手たちが歌い踊る(6)。カルロッタは旅人から警告されていたにもかかわらず、市長の策略に乗り、シンドゥルフォとの婚約に同意してしまい、一同カロロッタの美しさを称える(7)。

{第２幕}

序奏(8)ののち、海辺のカルロッタの宮殿で花婿の不在のままカルロッタは婚約の祝いをしている(9)。実は女たらしのシンドゥルフォは婚約の前にメイドのソーラと逢い引きをしようというのである。そこへ彼が誘拐され、ガスパローネの名で身代金が要求される(10)。旅人はカルロッタに対する愛を歌う(11)。また、ソーラはシンドゥルフォと逢い引きして留守勝ちのベノッツォの気を引こうとする(12)。カルロッタは身代金を準備するが、この誘拐事件は旅人が仕組んだわけである。ベノッツォが身代金をガスパローネに届けるといって10,000ツェッキーネを持ち去り、自分の懐へ入れる。カルロッタの部屋に旅人が忍び込み、愛を告白し、自分がガスパローネだと名乗り、驚くカルロッタに金庫の鍵を出させ、遺産の100万ツェッキーニを奪って去る(13)。駆けつけた市長らに、実は旅人を愛しているカルロッタは盗賊は誰か判らないという(16)。ここに間奏曲の美しいワルツ(14)(図11音楽(15)が入る。



J. W. 4272a

図11.「ガスパローネ」間奏曲のワルツ（ピアノ・スコアから）。

{第３幕}

この強盗事件の翌日、町に戒厳令がひかれようとする。そこへコルティチェルリ大佐率いる近衛兵の一連隊がやって来て、市長と警察署長の息子シンドゥルフォに警告する。すなわち、盗まれた100万ツェッキーニ、身代金、そしてガスパローネを逮捕せねば職を解くと(17)。そこへ兵士の身なりをした旅人が現れ、市長ナゾーニと交渉したいと言う。すなわち、シンドゥルフォがカルロッタを諦めるなら、代わりに身代金を取り返し、ガスパローネは永久に現れないようにする、と。財産を失ったカルロッタにもはや興味の無くなったナゾーニは息子が彼女と結婚する必要がなく、婚約は解消される(18)。実は、金が無ければこのような結果になることをカルロッタに知らせるために自分が金を奪ったのだと旅人はカルロッタに告げる。そこへガスパローネの名で１万ツェッキーニはシンドゥルフォに返還される。こうして旅人は晴れてカルロッタを抱き(19)、100万ツェッキーニが二人の結婚祝いとしてガスパローネの名で贈られる。こうしてすべて円満に納まるが(20)、誰がガスオパローネなのか、という疑問は残されたまたフィナーレとなる(21)。というのは、ガスパローネはメッシナの牢獄にすでに数ヶ月間繋がれているからである。

表10.「ガスパローネ」の曲番号（Josef Weinbergerの）ピアノ・スコアによる）

Vorspiel	前奏曲
{1. Akt}	{第１幕}
1. Introduktion	導入部
2.Chor und Auftrittslied Nasone	合唱とナゾーニの登場
3. Auftritts-Ensemble Caroloota	カルロッタの登場ーアンサンブル
4. Romanze (Erminio)	ロマンス（見知らぬ人）
5. Duett (Carlotta-Erminio)	２重唱（カルロッター見知らぬ人）
6.Lied (Benozzo mit Tanzpaaren)	リート（ベノッツォと踊る２人）
7. Finale I	フィナーレ　1
{2. Akt}	{第２幕}
8. Introduktion	導入部
9. Terzett (Carlotta, Zenobia, Nasone)	３重唱（カルロッターツェノビアーナゾーニ）
10. Auftritt und Couplet Benozzo	ベノッツォの登場とクプレ
11. Lied (Erminio)	リート（見知らぬ人）
12. Duett (Sora-Benozzo)	２重唱（ソーラとベノッツォ）
13. Duett (Carlotta-Erminio)	２重唱（カルロッタと見知らぬ人）
14. Zwischenspiel	間奏曲
15. Ballet	バレー
16. Finale II	フィナーレ
{3. Akt}	{第３幕}
17. Chor	合唱
18. Reminiszenz (Sora, Benozzo, Massaccio, Sindulfo)	追憶（ソーラ、ベノッツォ、マサッチオ、シンドュルフォ）
19. Duett (Erminio-Carlotta)	２重唱（見知らぬ人とカルロッタ）
20. Marschmusik	行進曲
21. Finale III	フィナーレ３

3.「ガスパローネ」の音楽

筆者の聴いたフォルクスオーパーの演奏と、レコードの演奏を**表11**に示す。フォルクスオーパーの演奏は実に手慣れたもので、ウィーンの親しい友人エーリヒ・ヒューブル夫人のエリーザベトさんがフォルクスオーパに同行してくれ、このオペレッタを初めて聴く筆者にこの複雑なストーリーを説明してくれたことを思い出す。市長を演じたワッサーロフが達者な歌と演技を見せたのが印象に残った。

表11.「ガスパローネ」の演奏

登場人物	フォルクスオーパー(1981)	全曲レコード(Electrola)
Leitung	Rudolf Bibl	Heinz Wallberg
Orchester	Volksoper	Münchner Rundfunkorthester
Carlotta	Marjon Lambriks	Anneliese Rothenberger
Nasoni	Rudolf Wasserlof	Günter Wewel
Sindulfo, sein Sohn	Kurt Hümer	Willi Brokmeier
Der Fremde	Kurt Schreibmayer	Hermann Prey
Benozzo	Erich Kuchar	Martin Finke
Sora, seine Frau	Helga Papouschek	Gabriele Fuchs
Massaccio, Wirt	Peter Gerhard	(Luigi) Gerd W. Dieberitz

筆者の知る限り唯一の全曲レコード、エレクトロラ盤ハローテンベルガー、ブロックマイヤー、プライら、例によって舞台ではお目にかかれない顔ぶれを揃えた豪華版の演奏である。このシュテファンとクネップラーによる台本における曲番号はピアノスコアと全体において異なっており、ほとんど対応がない。しかし、個々の登場人物に多少の改変はあるが、全体的なストーリーは同様である。ここにはカルロッタと旅人の間の美しい2重唱がある。これをミレッカーの章の最後に紹介しておきたい。

(C) O schweigen Sie, ich will nichts hören!
O sprechen Sie nicht weiter mehr!
Wozu mir noch das Herz beschweren?
Mir ist ja schon um's Herz so schwer!
Wie gerne würd' ich all dies hören,
Ich hab's im Stillen mir erhofft....
Muss, mehr zu sagen mir verwehren,
Denn leider schweigen muss man oft!

(F) Sprich es aus, das süsse Wort,
Und verschliess' dich nicht!
Das von Liebe spricht!
Deiner Wangen Glut verrät,
Was Dein Mund verschweigt,
Und dein heissen Blick gesteht,
Dass sich dein Herz in Liebe mir neigt!

（C）Deiner Stimme Zauberklang
Ganz verwirrt mich macht!
Ein Gefühl, so sehnsuchtsbang,
Ist in mir erwacht!
Soll ich folgen diesem Ruf,
Der so lockend klingt,
Dem betörend süssen Ruf,
Der mir vielleicht das wahre Glück bringt?
（F）Carlotta.. ich liebe Sie, wie ich noch nie
eine Frau geliebt habe! Vergessen Sie alles,
was Sie hier zurück hält und folgen Sie mir!

Ⅲ. ツェラー(Carl Zeller, 1842-1898)

医師の子息として生まれたツェラーは幼時から音楽の才能を示し、11歳でウィーン宮廷少年合唱団員となった。しかし、大学で法律を学び、学位を得て文部省の役人となり、文部官僚としてツェラーは出世し、枢密顧問官になった。1897年、ウィーン上級地方裁判所は彼を相続手続における偽証罪で１年間刑務所に収監するに至ったが、彼は病気のため出獄し、1898年８月17日にバーデンで死去した。

ツェラーは学生時代から音楽も学び、1868年最初の作曲をした。そして1876年に喜劇的歌劇、すなわちオペレッタ「ジョコンダ」(Joconde) を作曲した。これはアンデアウィーン劇場で上演され、批評家には好評を博したが、20回の演奏で終わった。続いて1886年「浮浪人」(Der Vagabund) を作曲したが、台本がお粗末だったためこのオペレッタは成功しなかった。ツェラーの成功は1891年作曲の「小鳥売り」によって決定的なものとなった(Schneidereit, 1981)。現在ではツェラーのオペレッタは「小鳥売り」(Vogelhändler) のみが有名であるが、このあと1894年「炭坑夫」(Der Obersteiger) が作曲されたものの、これはほとんど上演されない。しかし、このオペレッタのなかの美しいワルツ「気を悪くしないで」(Sei nicht bös) は歌われることがある。筆者のもつレコードの一つにエリーザベト・シュヴァルツコップがオペレッタ・アリアを歌っている一枚がある (Angel, 35696) そのなかにこの曲があるが、彼女の歌唱は絶品である。

Wo sie war die Müllerin,
Zog es auch den Fischer aus,
Doch sie lachte ihn nur aus,
Denn sie wollte hoch hinaus,
Nachts, da er zum Fischen geht,
Kopft er leise an und fleht:

Wherever mill-girl went,
The fisherman was drawn there too;
But she only laughed at him,
She wanted to do better for herself,
At night, when he went fishing,
He'd softly knock and plead:

"Werde mein und mach mir auf!"	"Be mine and open up for me!"
Doch sie singt spöttisch drauf:	But she mocked him and sang:
"Sei nicht bös, es kann nicht sein,	"Don't be cross, it cannot be;
Sei nicht bös, und schick dich drein,	Don't be cross, just get used to it;
Sei nicht bös und mach kein G'sicht,	Don't be cross, or pull a face;
B'hüt' dich Gott, vergiss mein nicht!"	God guard you, and don't forget me!"
Und so zog die Müllerin	So the millgirl went off
In die Welt mit stolzem Sinn,	Proudly into the world;
Endlich kommt sie wieder her,	At last she came back home,
Aber stolz ist sie nicht mehr.	But she was proud no longer.
Fährt nun nachts der Fischer aus,	Now, when the fisherman goes out at night,
Ruft sie bang zu ihm hinaus;	She calls out anxiously to him,
"Tröste mich und komm zu mir,"	"Comfort me and come to me,"
Doch jetzt singt er zu ihr:	But now he sings to her:
"Sei nicht bös, usw.:	"Don't be cross, etc.:

1.「小鳥売り」の背景

このオペレッタはヴェスト（Moritz West）とヘルト（Ludwig Held）の台本によっており、1891年1月10日、アンデアウィーン劇場で初演された。18世紀初めのドイツ、ラインプファルツ（Rheinpfalz）が舞台である。現在ここはトイツの1州であるが、かっては選定候領であった。図12に示したようにこの地方はフランスの北、ルクセンブルグ（Luxembourg）の東に隣接しており、ボンのあるノルトハイム・ヴェストファーレン（Nordheim-Westfalen）の南に位置する。フランスとの間で宗教的、政治的紛争の原因となってきたラインラントの一部である（加藤雅彦、1997）。この州は名の如く、ライン川の上流にあり、ライン下り、大司教選定候どで有名なマインツ（Mainz）、トリアー（Trier）やコブレンツ（Koblenz）を持っている。このライン・プファルツからは、バーデン・ヴュルテンベルク州（Baden-Württemberg）、バイエルン州（Bayern）、スイスに囲まれたボーデン湖（Bodensee）を経てオーストリアのチロル地方（Tyrol）と連絡できる。

{選定候}（Kurfürst）

神聖ローマ帝国（Heiliges Römisches Reich Deutscher Nation）皇帝を選挙する資格を持つ諸侯である。10世紀、ドイツ王オットー1世がローマ教皇から帝冠を受けて以来、ドイツ王は即位ののちローマに赴いて戴冠し、神聖ローマ皇帝の位を兼ねた。こうしてドイツ王は帝権と教権を握った。13世紀に皇帝は選定候による選挙によって選ばれるようになった。神聖ローマ帝国皇帝位は末期にはオーストリアのハプスブルク家が掌握していたが、1806年、ナポレオンによって帝国は瓦解した。選定候は7名で、マインツ（Mainz）、ケルン（Köln）およびトリアー（Trier）の3名の大司教（図12の四角で囲んだ都市）と4名の諸侯からなっていた。それらは(1)ライン・プファルツ伯、(2)ザクセン公（Sachsen）、(3)ブランデンブルク辺境伯

（Brandenburg）、それに(4)ボヘミア王（Böhmen,現チェコ）であった（図12の２重アンダーラインの諸邦）。地図を見ると、大司教選定候はプファルツとノルトハイ・ヴェストファーレンというドイツ西部に集中していることがわかる。このオペレッタに登場するのはこの内のライン・プファルツ伯である。この選定候は大司教選定候３名のうち２名を領邦に抱えていたことになる。これら選定候によって選ばれた神聖ローマ帝国皇帝が、長くオーストリア・ハプスブルク家に独占されていたことはヨーロッパの中世から近世に至る歴史に重要な意味を持つのであろう。

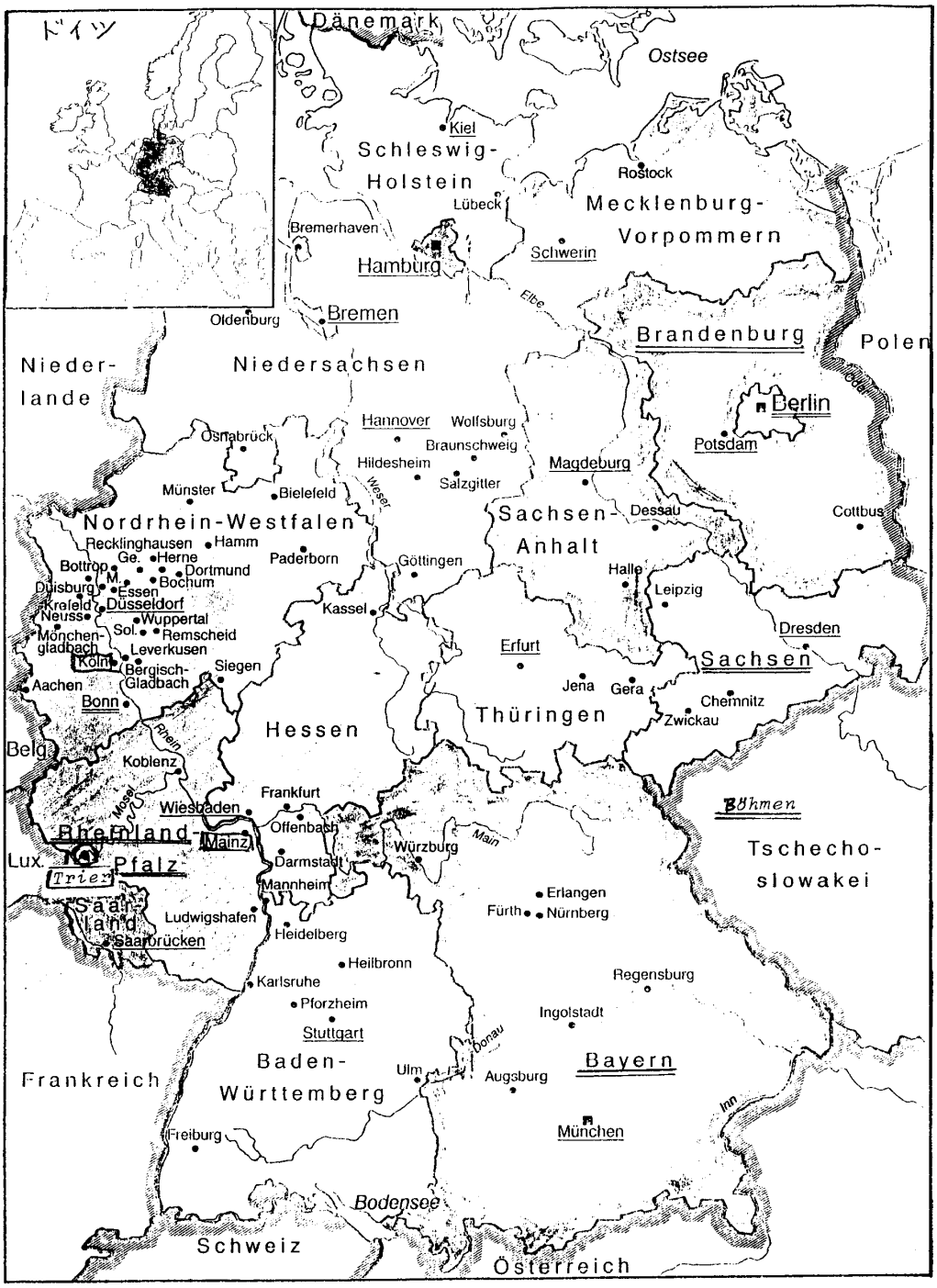


図12. ドイツ地図。西に「小鳥売り」の舞台となるライン・プファルツ州がある。

表12.「小鳥売り」の登場人物

選定候伯夫人マリー	Kurfürstin Marie
夫人の友人アデライーデ	ihre Gesellschfterin Adelaide
選定候森林官	kurfürstlicher Wald- und Wiesenmeister, Weps
その甥で士官スタニスラウス	sein Neffe, Leutnant der Garde, Stanislaus
旅篭「鹿」の主人で市長シュネック	Inhaver des Gasthofes "Zum Hirschen" und Bürgermeister, Schneck
その娘エメレンツ	seine Tochter, Emerenz
郵便配達クリスチーネ	Briefchristl, Oberhuber Christine
小鳥売りアダム	Die Tiroler, Vogelhändler, Adam

表13.「小鳥売り」のピアノ・スコアによる曲番号

Vorspiel		
1. Akt		
1. Introduction	a) Chor	Hurra, Hurra!
	b) Schneck und Chor	Jekus,jekus, das ist schwer
2. Auftritt Adams		Grüss enk Gott
3. Duett (Stanislaus und Weps)		Als dir die Welt voll Rosen hing
4. Auftritt der Kurfürstin (Rhein Walzer)		Schnell, kommt nur Alle
5. Auftritt Christels Ich bin die Christel von der Post		
6. Terzett (Christel, Stanislaus und Weps)		Ach, Ihre Reputation ist just
7. Finale	a) Chor	Vivat hoch! vivat hoch!
	b) Duette (Kurfürstin und Adam)	Schenkt man sich Rosen
	Zwischenakt	
2. Akt		
8. Introduction	a) Chor	Haben Sie gehört
	b) Weps	Man munkelt
9. Duett (Süffle und Würmchen)		Ich bin der Prodekan
10. Terzett (Christel, Kurfürstin und Adelaide)		Bescheiden, mit verschämten Wangen
11. Duett (Christel und Stanislaus)		Mir scheint, ich kenn' dich
12. Finale	a) Adam und Chor	Wir spiel'n bei Hof
	b) Adam	Wie mein Ahn!
	c) Kurfürstin	Wem bring ich den Pokal Zwischenakt
3. Akt		
13. Introduction	(Frauenchor)	Nein, nein, nein, nein
14. Lied (Kurfürstin)		Als geblüht der Kirschenbaum
15. Couple (Adam)		Komm' ih iazt wieder ham
(Refrain: Herr Pfarrer, mir i's klar, dass i amal a Gimpel war)		
16. Terzett (Christel, Stanislaus und Adam)		Kämpfe nie mit Frau'n
17. Finale (Kurfürstin, Christel, Adelaide, Adam, Stanislaus, Weps und Chor)		B'hüt enk Gott

図13.「小鳥売り」の切手、2シリング。

2.「小鳥売り」のストーリー

さて、「小鳥売り」の登場人物は表12のとおりである（図13）。ストーリーをピアノスコアの曲番号（表13）に従って説明したい。このオペレッタは珍しく私が観たウィーン・フォルクスオーパーにおける演奏（1983年11月5日）も全曲レコードもほぼ完全に表13のピアノスコア曲番号と一致していた。ただし、第3幕15のアダムのクプレはレコードでは省略され、16を15とし、フィナーレは16となっている（括弧内の番号は曲番号）。

序曲に続き、

{第1幕}

選定候の狩猟地に候が来るという話が伝わり、住民は大恐慌を来す。というのは、同地のイノシシはみな住民が捕ってしまい、一匹も残っていないからである。しかし、今まで選定候が自らここへ来たことがないので、一体どうしてだろうと村長シュネックと村人はいぶかる。そこへ狩猟官のウェップスがやって来る。彼は、もしイノシシ一匹もいなかったら自分は地位を失うから、獲物を何とかしろ、と村長に要求する。村人は、飼い豚で勘弁してくれと頼む。ウェップスは拒絶し、埋め合わせをしろと、まず処女を提供せよ、と言う。村人たちは処女はいないから寡婦にしてくれと頼み、ウェップスと賄賂の交渉をする(1)。そこへチロルの小鳥売りアダムがやって来て、美しい、可愛い小鳥を買いなさい、と人々に呼びかける(2)。アダムは結婚の約束をしている恋人で郵便屋のクリストルを探す。ウェップスの甥のスタニスラウス伯爵がやってくる。彼は選定候の命令でケルンに行くことになっていたが、選定候はこの村に来ないことになったと伯父に告げる。村人から賄賂も取ったのに狩りができないのは困るので、二人はスタニスラウスを選定候に仕立てることにする。二人はどのように振る舞うかを相談する(3)。選定候が夫人をいつもほったらかして出かけるので、夫人は夫が浮気をしているのではないかと疑い、侍女アデライーデを伴って村へこっそりとやって来る。そしてラインの子である私にはこの田園は素晴らしい、と讃歎する(4, 図12)：

Oh wie schön!	Oh, how lovely!
Oh wie nett,	Oh, how nice,
ist es schön!	isn't it lovely!

"Fröhlich' Platz - Gott erhalt's!"
Das soll stets Devise sein.
Nicht geniert,
Wo der Jäger Stelldichein!

"Happy Patatinate, God watch ever it!"
That shall always be the motto.
Not dismayed, on the trail.
Of the huntsman's hiding place.

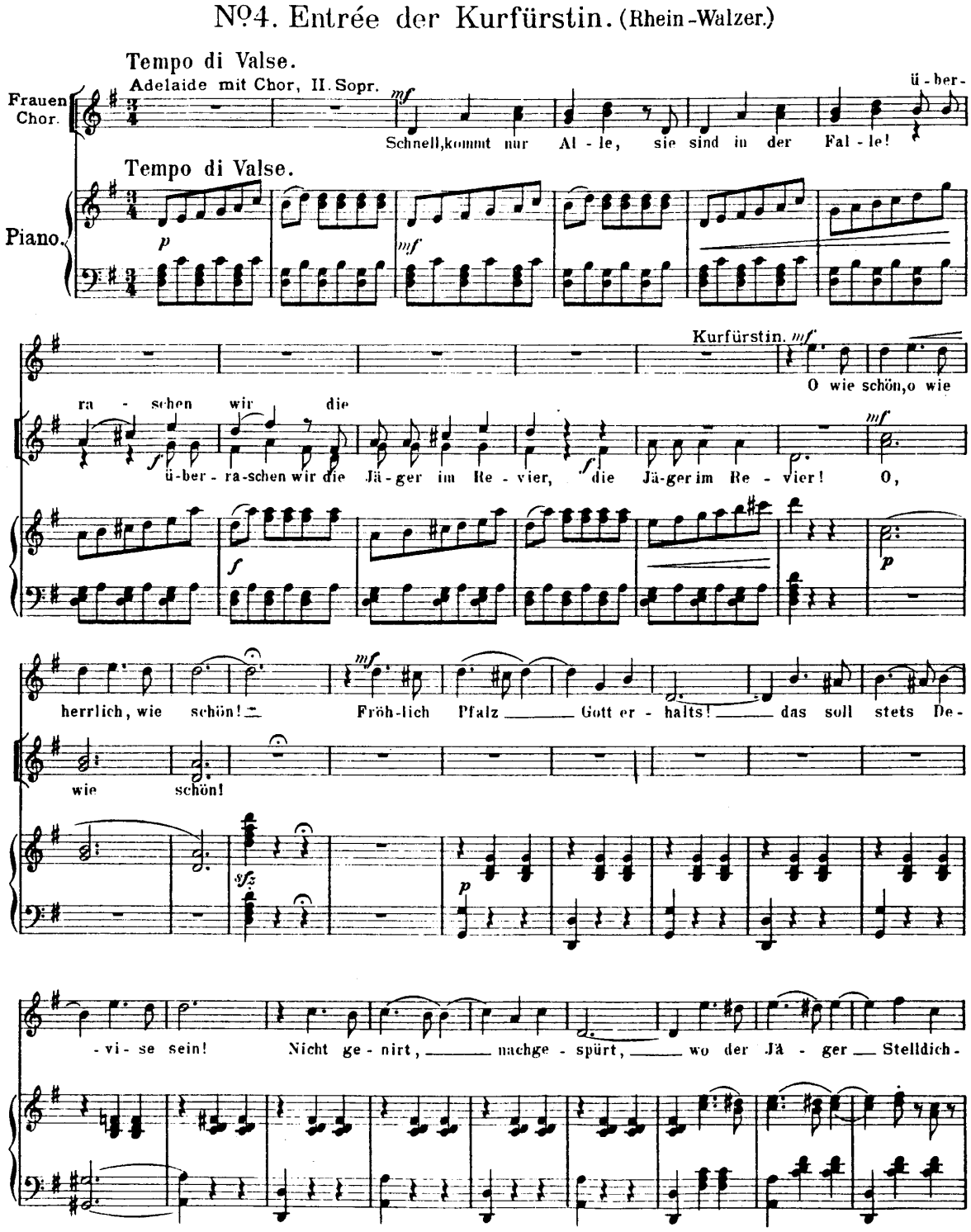


図14「小鳥売り」において選定候夫人が歌う“ライン・ワルツ”。

そこへアダムがやってきて夫人に目を留め、“君の名は何？”と訪ねるが、お忍びの夫人は“私の名はマリー”と答える。アダムの持つ花が気に入った夫人はその花の名を訊く。“エーデルワイス”と答えると、夫人はそれを買いたいという。アダムは売り物でないがあなたに接吻と引き替えにあげるというが、アダムはアデライーデに追い払われる。そこへクリストル（クリッシー）が登場する（5，図15）：

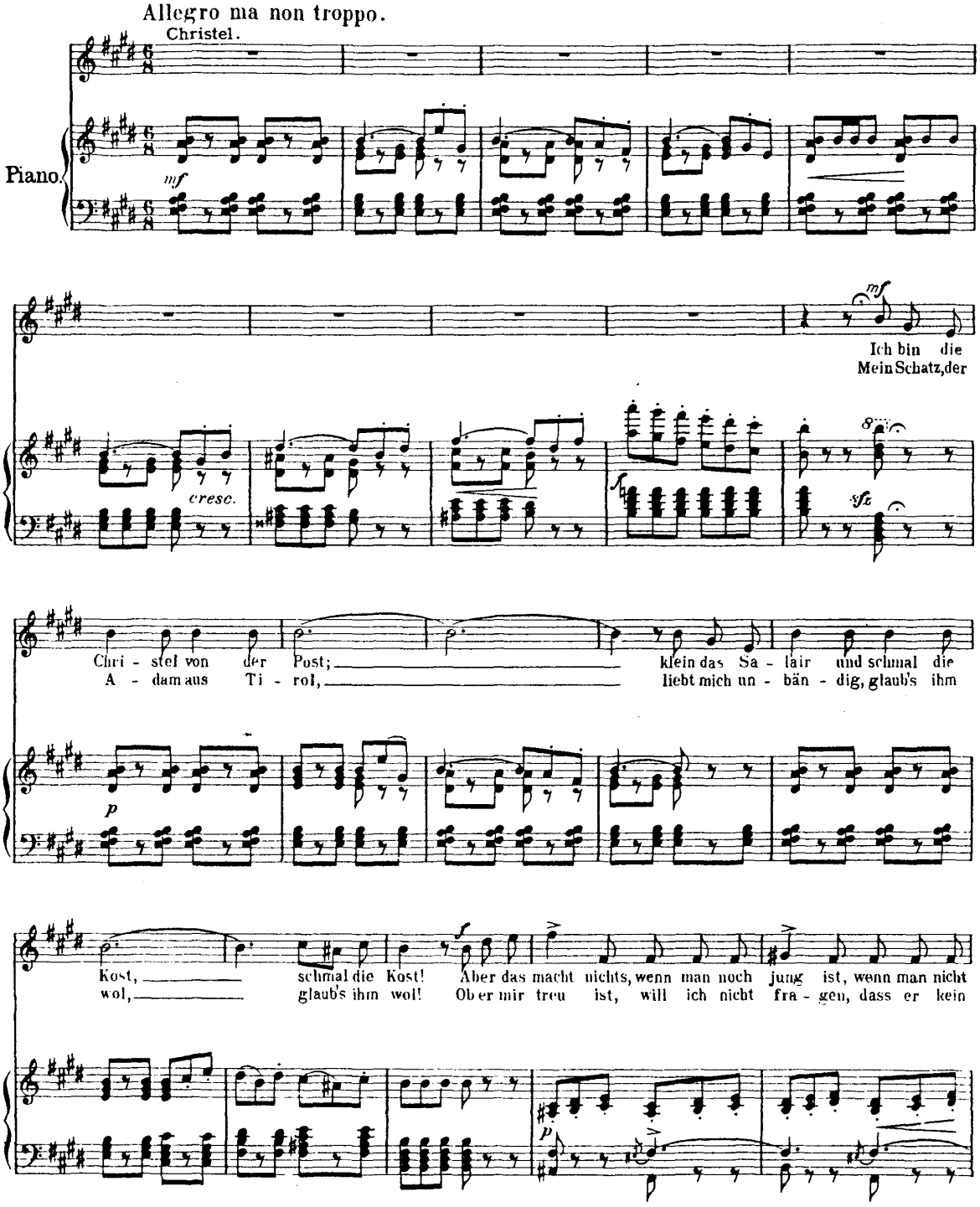


図15.「小鳥売り」において郵便やクリッシー登場の歌（ピアノ・スコアによる）。

Ich bin die Christel von der Post.	I am Chrissy the post-girl.
Klein das Salär und schmal	small is the pay and thin the board!
die Kost!	
Aber das macht nichts, wenn man	But that doesn't matter when you're
noch jung ist.	young.
Wenn man nicht übel, wenn man	When you're not ill and in good form.
im Schwung ist.	
Ohne zu klagen	Without complaining
Kann man's ertragen,	you can ensure it,
Wenn man dabei	if all the while
Immer lustig und frei!	you're merry and free!
Bin die Christel von der Post;	I'm Chrissy the post-girl;
Mein Amt ist herrlich,	My office is splended,
Wenn auch gefährlich,	if somewhat dangerous,
Auf die Adresse kommt es an;	it all depends on the address;
ist's ein Galanter,	if it' a galant,

そこへアダムがやって来る。二人はアダムに定職がないのでなかなか結婚できない。ウェップスはクリッシーに目を付け、スタニスラウスが策を弄する。彼を選定候と思ったクリッシーはアダムの就職を頼もうとするのをいいことに彼女を四阿へと誘う(6)。第1幕のフィナーレとなり(7)、偽の選定候のため混乱が起こる。夫人は選定候に会えると思うが、どうやら現れない。アダムはクリッシーが選定候と逢い引きしていると思い、夫人とアダム、クリッシーとスタニスラウス、これにウェップスがからみ、混乱する。この間、アダムは次第に夫人に心を寄せ、夫人が彼にバラの花束をくれたとき、有名なアリアを歌う(図16)：

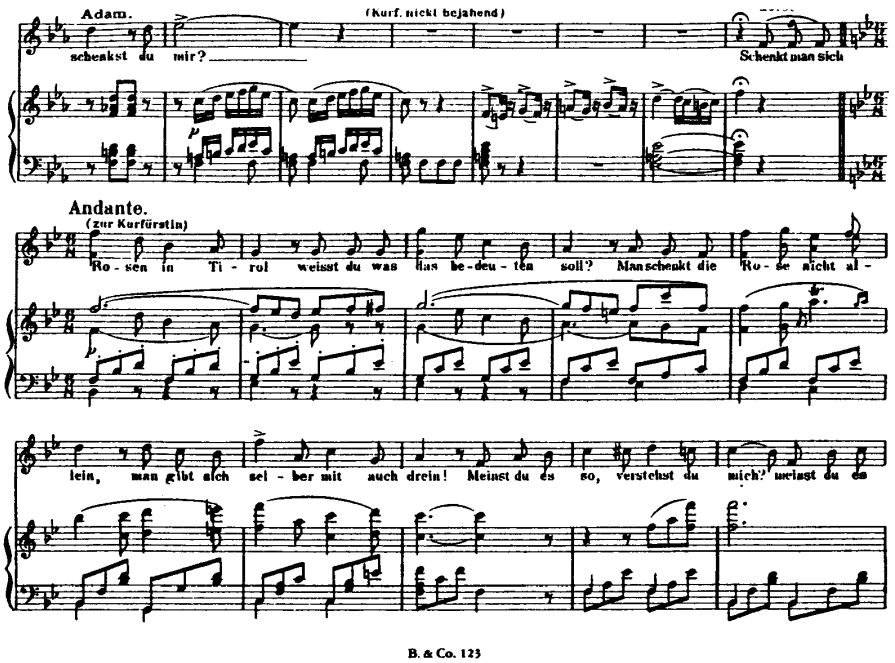


図16.「小鳥売り」でチロル人の小鳥売りアダムが選定候夫人に歌う“バラ”の歌（ピアノ・スコアによる）。

Schenkt man sich Rosen in Tirol,	When one gives roses in the Tyrol,
Weisst du, was das bedeuten soll?	do you know what that means?
Man schenkt die Rosen nicht allein,	one doesn't give roses on their own,
Man gibt sich selber mit auch d'rein!	one gives onseself along with them!
Meinst du es so? Verstehst du mich?	Is that what you mean? Do you understand me?
Meinst du es so, dann, Liebste, sprich!	If you mean it thus, then dearest speak!
Meinst du es so, so tröste mich,	If you mean it thus, so console me,
Gib mit der Rose mir auch dich!	give me with the rose yourself as well

こうして、アダムはクリッシーを見限って夫人を取る、とクリッシーに宣言する。

{第２幕}

何がなんだかさっぱりわからないと一同が大騒ぎである(8)。アダムの職を動物園で得るため、彼を２人の教授、ズフレとヴュルムヘンが試験をすることになる(9)。このとき、夫人はアダムに特別の配慮をするよう頼み、アダムは無事に及第し、動物園に職を得ることになる(この８，９はフォルクスオーパー公演では無く、第１幕の四阿のなかでクリッシーが選定候ー実はスタニスラウスと交渉して実現することになっていた)。クリッシーはこれでアダムと結婚できると喜ぶが、彼女が他の男と逢い引きしたと思っているアダムは彼女を拒否する。他方、ウエップスは甥のスタニスラウスの借金を返済するため彼を年長のアデライーデと結婚させようとする。ここで３人の女はアダムがらみでやりとりする(10)。選定候に化けたスタニスラウスは、アダムについて四阿でクリッシーから依頼を受けて以来、彼女にぞっこんになり、愛のワルツを歌い、クリッシーはそれをかわそうとする(11)。選定候夫人をただのマリーだと思っているアダムは彼女と一緒になろうと、「料理はできるか？」などと訪ね、夫人を困らせる。そこへマリーが夫人だと知るクリッシーがやって来て、彼女に言い寄る選定候（実はスタニスラウス）から助けて欲しいと頼む。夫人はクリッシーの言う選定候が彼女の夫でないことを悟り、３人で罠を仕掛けて真実を明らかにしようと相談する。また、これにより、夫人も夫が浮気をするために狩りに行ったのではないと安堵する(12)。ここでアダムはチロル弁で祖父以来のチロルを称えるワルツをチターの調べに乗せて歌う(図17)。

Wie mei Ahnl zwanzig Joahr'	When my grandpa was twenty
Und a g'sunder Wildschütz woar,	and a flourishing poacher,
Hot beim Mondschein er voll Lust	by moonlight and full of life
s' erste Mal sei Reserl busst,	he kissed his girl for the first time..
Wie er's küsst, singt g'rad im Tol	As he kissed her, down in the valley
Wunderschön a Nochtigall.	there came the wonderful song of a nightingale.

Gebt nur acht, wann d'Zither klingt,	Just watch out when the zither sounds,
Wann die Saite hell sich schwingt,	when the strings start vibrating,
Wann dann laut a Glöckerl schlägt,	when the bell sounds out loud,
Dan - ja, dann kommt der Effekt.	then, yes, then you get the effect!

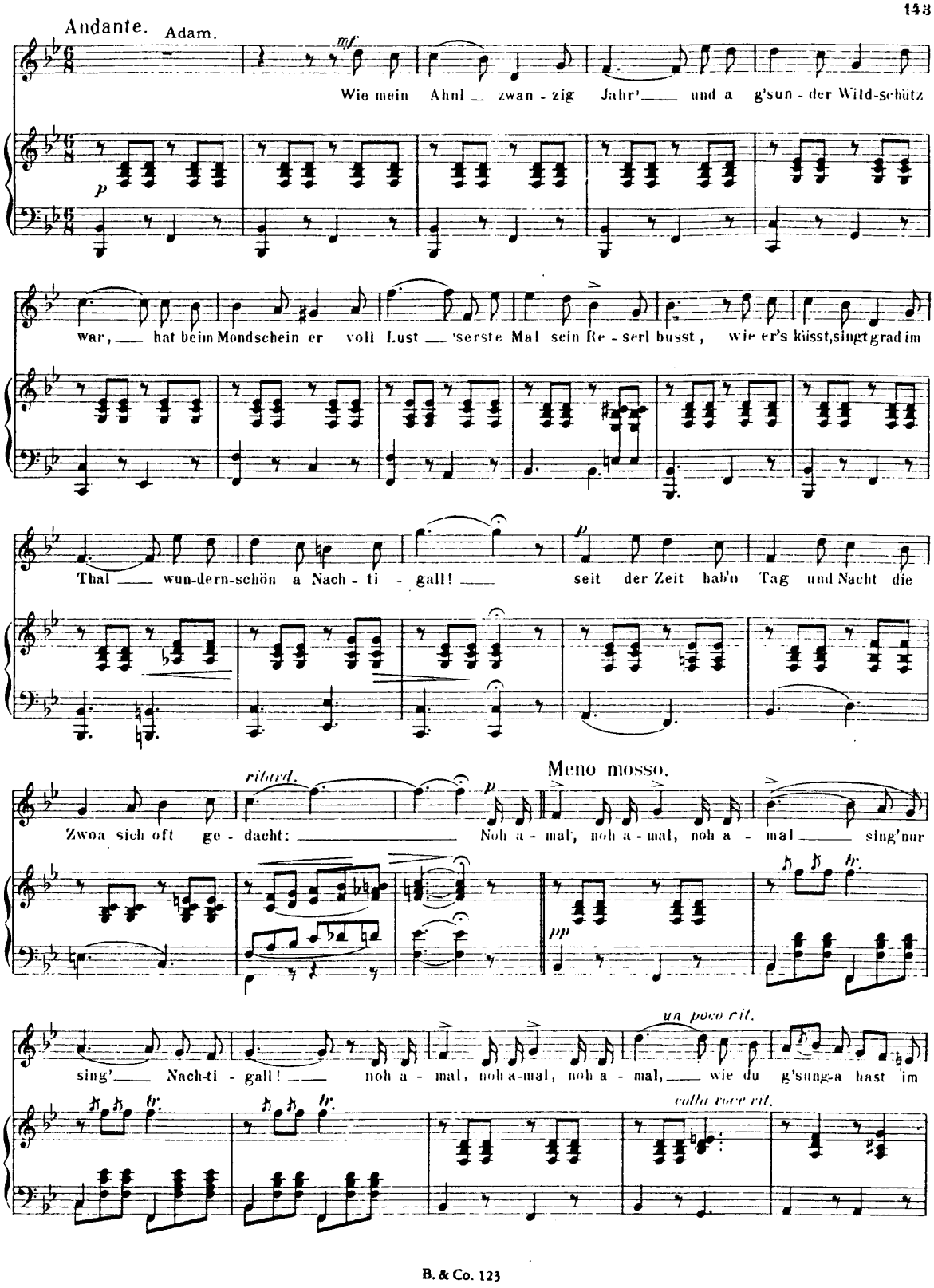


図17.「小鳥売り」においてアダムが故郷のチロルを思ってチターの音とともに歌う故郷の歌（ピアノ・スコアによる）。

割り切れないアダムは依然としてクリッシーにスタニスラウスと結婚しろ、と言いクリッシーを受け付けない。こうして混乱のうちに第2幕のフィナーレとなる。

{第3幕}

夫人は選定候が彼女に貞節であることを確かめ、女官のアデライーデと喜ぶ(13)。そして、夫人は彼らの結婚の頃の楽しかったことを思い出して歌う(14)。アデライーデはスタニスラウスに「あなたを助けましょう」というが、金目当ての彼は金を貰って逃げようと考えている。伯父のウェップスは、彼女にそのことを告げ、「私と結婚しよう」とアデライーデに申し込む。スタニスラウスはやむなくクリッシーと結婚しようと申し出るが、彼女は私が愛しているのはこのチロル男だ、という。しかし、依然としてアダムは、自分が愛しているのはマリーで、お前ではない、と頑強である。一同、女と争うのは決して良くない、と歌い(15省略、16)、スタニスラウスに愛想を尽かしたアデライーデはウェップスと一緒になることにし（このくだりもフォルクスオーパーでは異なる)、アダムは思い直してクリッシーにバラを捧げ、彼女や仲間と一緒に（選定候の動物園への就職は勿論スタニスラウスのでたらめ）チロルへ帰ることになって幕となる(17)。

出だしはなかなか面白そうな展開を示すが、第3幕の結びはややお手軽で物足りない気がする。しかしツェラーの美しい音楽はこのオペレッタの根強い人気のもとになっているのではないか。

3.「小鳥売り」の音楽

1983年11月5日にフォルクスオーパで筆者が聴いたときの演奏者と、所持する全曲レコードの演奏者を**表14**にまとめる。当日の筆者に日記にはただ「変わったオペレッタだ」としか書いていないが、選定候夫人のホルツマイヤーと村長のワッサーローフの歌と演技が印象に残っている。

レコードの演奏者は抜群である。他のオペレッタ全曲レコードと同様、一流の歌い手を集め、舞台では実現しそうもないキャストで一流の歌を聴かせるので、あたかも舞台を観るように想像力をかき立てられ、居ながらにして楽しめる。ただし、実際の舞台とオーケストラによる演奏を経験すればこそ想像も現実的な楽しみとなるのであろうから、やはり、フォルクスオーパーなどで実物を観る機会は貴重である。

表14.「小鳥売り」の演奏者

	フォルクスオーパー（1983）	全曲レコード（EMI、1874）
Leitung	Conrad Artmüller	Willi Boskovsky
Orchester	Wiener Volksoper Orch.	Wiener Symphoniker
Kurfürstin Marie	Sylvia Holzmayer	Anneliese Rothenberger
Adelaide	Gabriele Juster	Gisela Litz
Baron Weps	Karl Dönch	Walter Berry
Stanislaus	Kurt Schreibmayer	Gerhard Unger
Adam	Alois Aichhom	Adolf Dallapozza
Christl	Milena Rudiferia	Renate Holm
Schneck, Bürgermeister	Rudolf Wasserlof	Wolfgang Anheisser

Ⅳ．シュトラウス、オスカー（Oscar Straus, 1870-1954）

ワルツ王シュトラウス一族とは関係のないオスカー・シュトラウスは苗字の最後のｓの字も一つ少ない。第二次世界大戦後まで生きたこのシュトラウスを果たして「金の時代」のオペレッタ作曲家の仲間に入れていいのかどうか、確かに疑問はある。事実、その作品のうち、「ワルツの夢」（Ein Walzertraum）についで1908年にアン・デア・ウィーン劇場で初演された「勇敢な兵隊」（Der tapfere Soldat）はアメリカ映画「チョコレートの兵隊」（The Chocolate Soldier）として上映され、筆者は1960年代はじめカナダでこの映画を観た。これはオペレッタと言うよりもむしろミュージカルのような作品である、という印象を持ったことを憶えている。また、代表作「ワルツの夢」をパリで観たとき、ストーリーが変えられ、ウィーン出身の主人公と女主人公がパリ出身にされ、奇妙な気がした。

１．オスカー・シュトラウス

1870年３月６日、シュトラウスはウィーンのレオポルトシュタットで生まれた。ここはユダヤ人居住区である。オスカーは早くから音楽的才能を示し、ウィーンではグレーデナー（Hermann Grädener）に学び、さらにベルリンで有名な作曲家ブルッフ（Max Bruch）に学んだ。そして早くも弦楽のためのセレナーデやヴァイオリンソナタを作曲し、1895年から1900年の間にブリュン（Brün）、テプリッツ（Teplitz）、マインツ（Mainz）、そしてベルリンでオーケストラのコンサートマスター（Kapellmeister）を歴任した。その後、指揮者に転じ、さらにオペレッタ作曲家となり、まずオッフェンバックのパロディーとして「陽気なニーベルンゲン」（Lustigen Nibelungen）など２つのオペレッタを作曲した(Wurz, 1964)。以後、1907年に「ワルツの夢」、1908年に「勇敢な兵隊」、1920年に「最後のワルツ」（Der letzte Walzer）、1925年に｛テレジーナ｝（Teresina）、1936年に「３つのワルツ」（Drei Walzer）、戦後の1950年に「彼女の最初のワルツ」（Ihr erster Walzer）そして1952年に「ボツェーナ」（Bozena）を作曲した。この間、オスカーは1930年にはニューヨーク、ハリウッドへ旅行し、「ワルツの夢」を「微笑む中尉」（The Smiling Lieutenant）という題名の映画撮影に携わった。ヒトラー時代、1939年から戦後の1948年までニューヨークにおいて作曲活動を行い、バート・イシュル(Bad Ischl)に帰った。1950年にはマックス・オフュールス（Max Ophüls）の映画「輪舞」（Der Reigen; シュニッツラー原作）に音楽を付けた。そして1954年１月11日、バート・イシュルで永眠。オスカーのワルツ・リズムには現代的なダンス音楽の要素が入っており、明らかに「金の時代」のワルツとは異なる。また、年代から言ってもフランツ・レハール（Franz Lehar）と同年生まれであるから、むしろ「銀の時代」に加えても良いかも知れない。しかし、筆者はオスカーの音楽には19世紀末の情緒が残っているように思うし、レハールよりもオスカーの初期のオペレッタのほうが早かったから、いわば“金―銀”の橋渡しの役目を果たしていると考え、敢えて本稿の「金の時代」の最後に加えることにした。

本題からはやや外れるが、19世紀末ウィーン文化を代表する作家シュニッツラーの「輪舞」について以下述べたい。それは、この作品がフランス映画（La Rondo）としてバウム（Ralph

Baum）監督によって作られ、オスカーが音楽をつけたが、いかにも世紀末の退廃したウィーンの情緒を、アントン・ウォールブルック（Anton Walbrook）演ずる舞台回しにより、各階層の人間模様の動きで描いており、そこにオスカーの独特のワルツが流れているからである（この映画のタイトルでは、オスカー・シュトラウスの最後のｓがssと二つになった綴りで間違っている）。

{シュニッツラー、Arthur Schnitzler, 1862-1931}

ウィーン大学医学部耳鼻咽喉科教授であった父の子として生まれ、自身も同大学で医学を学び、1885年、博士の学位を得た。内科、精神科、などの副手、そして父の助手を勤め、その間催眠術に興味を持って研究した。父の患者の影響を受けて演劇や文学に興味を持つようになった。そして、「新ウィーン文学」運動に参加、ホフマンスタール（Hugo Hofmannsthal）とともにこの派の代表と称せられるようになった。処女作「アナトール」以下、最後の大作「テレーゼ」に至るまで、幾多の名作を書き、若い頃に学んだ催眠術などの影響が作品に見られる特徴を持っている。

「輪舞」は1900年の作品で、人間の情欲の実相をリレーのように男女が次々と繋がる10のカプルとして精妙に描き出した小説である。これらの人物は、娼婦と兵隊、小間使い、金持ちの息子、若奥様、その夫、おぼこ娘、詩人、女優、伯爵、の10人で、いろいろな社会階層の人たちが「性」で繋がり、世紀末のウィーン市でそれぞれの階層が、その属する市と市周辺の地域と関連づけて巧みに描かれている（安井琢磨、1987）。映画では、メリーゴーラウンドを象徴的に利用し、舞台回しが話を繋ぎ、その動きとともにオスカー・シュトラウスの独特のワルツが素晴らしい効果をあげている。19世紀末のウィーンの諸階級の人々と彼らの属するリングシュトラーッセ（環状道路、）内外の人間模様を描いたいくつかの作品（安井琢磨、1983）、とくにシュニッツラーの小説をよく表現している。

この映画の音楽だけでも、筆者にはオスカー・シュトラウスは19世紀末的な作曲家で、そのワルツはやはり「金の時代」にふさわしいと思えるのである。その代表作「ワルツの夢」を紹介したい。

表15.「ワルツの夢」の登場人物

フラウゼントゥルム公国ヨアヒム13世	Joachim XIII von u. zu Flausenthurm
その娘ヘレーネ	Kronprinzessin Helene, seine Tochter
ロタール伯爵、ヘレーナのいとこ	Graf Lothar, ihr Vetter
ヴェンドロン、執事	Wendolin, Hausmeister
インスター男爵夫人フリーデリケ（侍女）	Friederike, Freiin von Insterburg
ニキ中尉	Leutnant Niki, Graf Hohenstein
モンツィ中尉	Leutenant Montschi Mayer
フランツィ	Franzi Steingruber

2.「ワルツの夢」のストーリー

ウィーン・ドプリンガー社発行のピアノ・スコアによる曲番号に従って説明することにする。登場人物と曲番号は表15, 16のとおりである。ただし、ここでもストーリーの細部は少々改変されている。例えば、ピアノ・スコアでは執事ヴェンドィンの役をフォルクスオーパーの演奏ではいとこのロタール伯爵にしているが、第3幕の演奏は全曲レコードではピアノ・スコアどおりにしていない。

表16.「ワルツの夢」の曲番号（ピアノ・スコアから）

1. Ouverture
 1.Akt
 2.Lied Friederike-Wendolin
 3.Einzugsmarsch und Hymne Friederik -Wendolin
 4.Lied des Niki
 5.Diett Helene
 6.Terzett Friederike-Nikki-Wendolin
 7.Walzerduett Niki-Montschi
 8.Finale Niki-Helene-Montschi
2.Akt
 9.Einleitung Chor
10.Lied der Franzi mit Chor
11.Duett Franzi-Niki
12.Lied des Niki
13.Terzett Helene-Franzi-Friederike
14.Duett Franzi-Wendolin
15.Finale II Wendolin-Montschi-Niki-Helene-Friederike-Franzi
3.Akt
16.Entr'akt (Gavotte)
17.Trio Niki-Lothar, Joachim
18.Duettino Friederike, Franzi
19.Finale III Helene-Franzi-Niki

[16.Introduktion Wendolin-Chor
 17.Duett Helene-Niki
 18.Duett Franzi-Niki
 19.Lied der Franzi
 20. Finale III Helene Niki

序曲(1)につづき、

{第1幕}

フラウゼントゥルム侯國、ヨアヒム13世の娘ヘレーネはウィーンで恋に落ちた伯爵ニキ中尉と結婚式をすることになった(2、3)。ヨアヒム13世はニキを世継ぎにするつもりである(4)。ヘレーネは侍女のフリーデリケと結婚の幸せを喜ぶ(5)しかし、ニキはこの宮廷の形式張った

堅苦しい式典や生活が厭で、故郷のウィーンに思いを馳せる(6)。結婚式後のある夜、ニキは宮殿を抜け出し、訪ねてきた親友のモンツィ中尉と公園レストランへ出かけ、そこでウィーンからきた女性オーケストラ（Die Damenkapelle）の演ずるウィンナ・ワルツを聴き、望郷の念に駆られる(7, 図16)。

Da draussen im duftigen Garten,
gebannt blieb ich plötzlich zurück,
da hörte ich lokkende Klänge,
die echteste Wiener Musik!
Es waren berükkende Weisen,
bald jubelnd, bald sehnsuchtsbang!
Der süsseste Wiener Walzer,
der innigste Liebessang!

ヘレーネは夫が自分を放っておくことが理解できない(8)まま、フィナーレとなる。

{第２幕}

行進曲(9)ののち、女性オーケストラをフランツィがウィーン風に指揮・演奏する(10)。ニキはフランツィに会うが、ウィーン娘の彼女に惹かれ、彼女もニキがこの國の皇太子であることを知らず、彼と忽ち恋に落ちる(11、図19)。

N: O, du lieber, o, du g'schelter, o, du ganz gehauter Fratz!
F: Bitt' Sie, bitt' Sie, gengan S' weiter!
Na, i werd' net Ihner Schatz!
N: O, du ganz gehauter Fratz!
F: Na, i werd' net Ihner Schatz.
N: Komm, o komm, du süsser Schatz.

ニキはこの恋に悩む(12)が、フランツィは「ワルツの夢」に酔う(13)。ヨアヒム13世とヘレーネのいとこのロタールはニキがいなくなったことに気づき、彼らも公園レストランへでかけ(14)、そこでやはりニキを探しに来たヘレーネとフリーデリケに会う。そしてニキを見つけだす。公園の人々はニキが誰であるかを知り、敬意を払う。こうして、フランツィの「ワルツの夢」は敢えなく終わる(15)。

「幕間、16」

{第３幕}

ヨアヒム13世とロタールに会い、ニキは苦しむ(17)。ヘレーネと友達になったフランツィは宮廷に招かれ、そこでニキがヘレーネから真に愛されていることを認識する(18)。そこで、彼らの愛情の邪魔にならぬよう、フランツィは身を引くことにし、オーケストラとともにウィーンへ帰る。ヘレーネはフランツィに習ったウィーン風に生活を変え、ニキは王位継承者としてヘレーネと以後幸せに宮殿に暮らすことになり(19)、全曲のフィナーレとなる(表16に括弧で示したように、全曲レコードでは第３幕の音楽はかなり改変してある)。

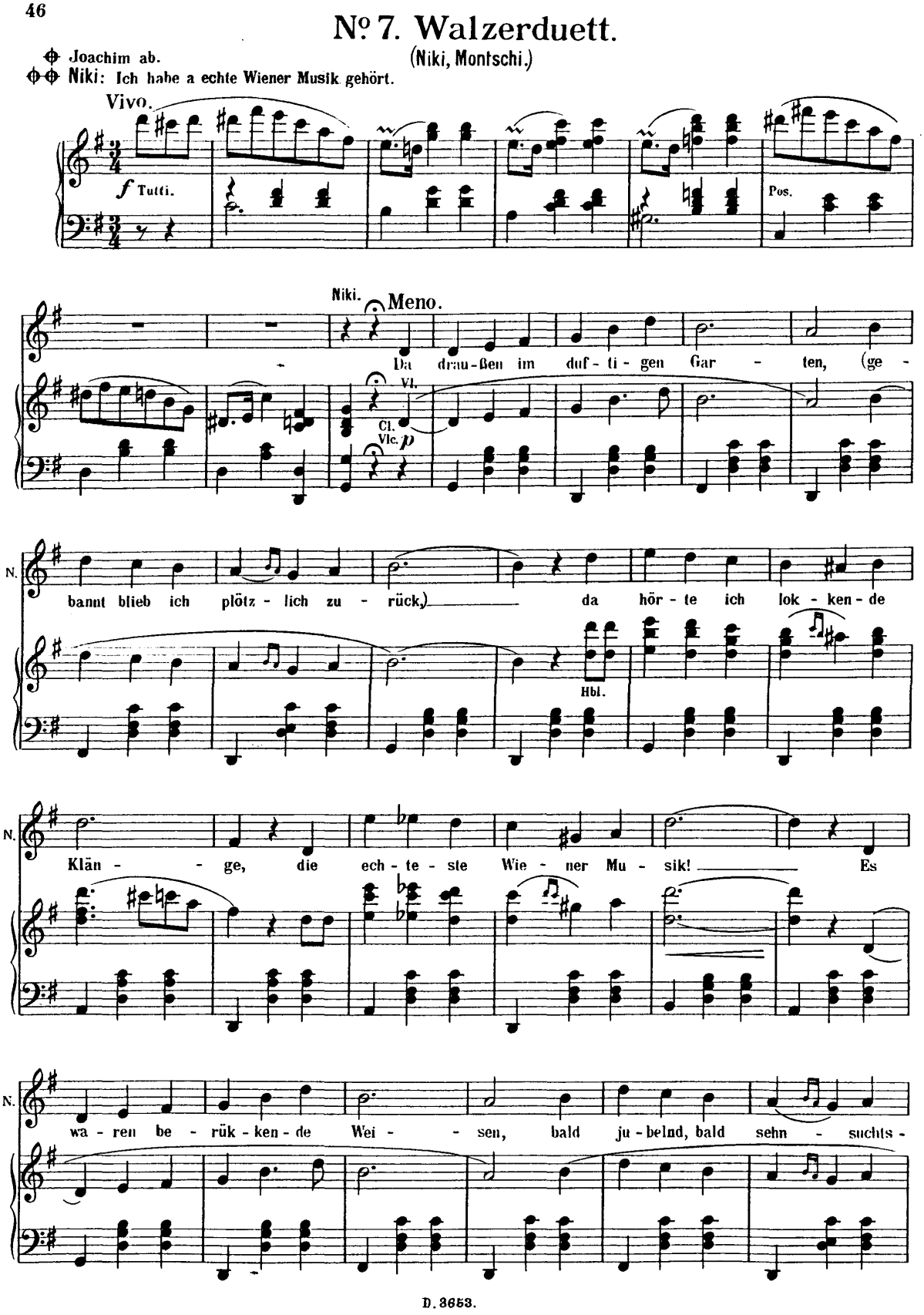


図18.「ワルツの夢」でニキが故郷ウィーンを思って歌うワルツ（ピアノ・スコアによる）。

Sehr langsames Walzertempo.

Fra. heur!

Niki. O, du lie - ber, o, du g'schei - ter, o, du

Sehr langsames Walzertempo.

Vl. Cl. Hr. Vlc.

Fra. Bitt' Sie, bitt' Sie, gen - gan S' wei - ter!

N. ganz ge - hau - ter Fratz!

Fra. Na, i werd' net Ih - ner Schatz!

(Stummes Spiel.)

cresc. Ob. Cl. Hr. Vlc. Fag. espress. Hr.

Niki. O, du ganz ge - hau - ter Fratz!

Trp. Fl.

D. 3653.

図19.「ワルツの夢」でニキとダーメンカペレのフランツィが歌う愛の二重唱ワルツ（ピアノ・スコアによる）。

3.「ワルツの夢」の音楽

筆者がこのオペレッタを聴いたのは1989年9月8日、フォルクスオーパーの公演1回である。その前、パリで見たものは前述のとおり、話をウィーンからパリに変えたフランス編だったので印象に残っていない。全曲レコードは一種類ある。フォルクスオーパー公演と全曲レコードの演奏者を表17に示す。

ここでフランツィの率いる女性オーケストラ、つまり“ダーメンカペレ”白いドレスを着た女性だけの小編成楽団について述べておきたい(図20)。筆者もこの楽団の演奏を2回聴いたことがある。1994年夏、ウィーンを訪れたときたまたまこのカペレの演奏を聴いた。その時の筆者の日記には次のようにある。

表17.「ワルツの夢」の演奏者

登場人物	フォルクスオーパー(1989年)	全曲レコード(EMI, 1971)
Leitung	Herbert Mogg	Willy Mattes
Orchester	Volksoper	Symphonie-Orchester Graunke
Joachim XIII	Karl Dönch	Anton Reimer
Helene	Melanie Holliday	Anneliese Rothenberger
Graf Lothar	Volker Vogel	
Wendolin		Wolfgang Anheisser
Friederike	Sylvia Holzmayer	Brigitte Fassbänder
Niki	John Dickie	Nicolai Gedda
Montschi	Franz Wächter	Willi Brokmeier
Franzi	Ulrike Steinsky	Edda Moser

図20. ダーメンカペレのフランツィを描いた「ワルツの夢」の切手、2シリング。

“8月21日(前略)Wienerwald近くのSavoyenstrasseにあるSchloss Wilhelminenbergへ行く。白色の立派な屋敷で、ここから市の眺めも絶好である。ここのホールでコーヒーとザッヒャートルテを食べながら Wiener Walzermädchenの演奏を聴く。ヴァイオリンを弾きながら指揮する女性1,チェロ1,コントラバス1,フルート1,クラリネット1,それにピアノ1という編成だ。なかなか雰囲気が良い。ホールの外側のバルコニーで踊る2人も居る。ホテル

へ送ってくれる。”

実はこれより数年前の1987年、京都グランドホテルで「ウィーン宮廷音楽の夕べ」という演奏会があり（11月18日）、やはり白いドレスを着た女性ばかりのカペレによる演奏で、ウィーン風の夕食を取りながら、この "Wiener Walzermädchen Orchester" の演奏するシュトラウス、シュトルツ、レハール、などウィンナ・ワルツを聴いた。編成はウィーンのヴィルヘルミーネンベルクで聴いたものと同じ、顔ぶれにも同一奏者を認識できた。このような女性演奏者だけによるカペレの演奏は見栄えも優雅であるし、技量はともかく、ウィーン情緒たっぷりの演奏はまさにウィーンのゲミュートリヒカイトそのものといえる。

さて、「ワルツの夢」である。また筆者の旅日記であるが、1889年、エジンバラにおける植物細胞壁に関する国際会議に出席したあとウィーンを訪れた。この時は出し物に恵まれ、フォルクスオーパーで９月６日には「こうもり」、７日には「ジプシー男爵」を聴き、翌８日には「ワルツの夢」を聴いた。９月８日のところには以下のように書いてある。

“９月８日（前略）Sieveringへ寄り、Heurigeで Weinと軽く食事をする。Sieveringは静かで観光客もおらず、いい雰囲気だ。Straussの[Draussen in Sievering]をElisabethらと歌う。Volksoperへ行く。一昨日の[Die Fledermaus]と同じ、中央前から４列目の同じ席だ。[Ein Walzertraum]を聴く。NikiはJohn Dickie（Eisensteinを歌った）。Montschi はF. Waechter、HeleneはMelanie Hollidayで、大変美しい声と姿だ。FranziのUlrike Steinskyは素晴らしく、音楽が良い。Elisabeth母が迎えに来てくれる。”

誉め言葉ばかりで批判がないくらい筆者は連日のフォルクスオーパーにおける公演を楽しんだ様子が表れている。たしかにフォルクスオーパの演奏は手慣れており、常に楽しめる。

全曲レコードの演奏者は一流を揃え、劇場では実現できそうもない顔ぶれである。このEMI版も例外でない。くつろぎながら、それこそコーヒーでも飲みながら、あたかもフォルクスオーパーの座席に座って舞台を見ている気分でレコードを聴くのは筆者の自宅における楽しみである。

Ｖ．オペレッタ「金の時代」について

前報（増田芳雄、1999）で述べたヨハン・シュトラウスのオペレッタの中、その死後に初演された「ウィーン気質」は19世紀はじめが舞台で、“ウィーン会議”を揶揄している。神聖ローマ帝国がナポレオンによって滅亡に導かれ、長く皇帝の地位を保ってきたオーストリア・ハプスブルク帝国も落日への路を辿ることになった（Spiel, 1994）。さらに1848年に起こった革命、1866年の対プロイセン戦争、と二重帝国は苦難の“秋”を経て世紀末を迎え、そして20世紀を迎えた。

19世紀はじめまでのウィーンにおける音楽の時代にはモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルト、ブラームスが活躍した。そして、世紀末から20世紀にかけて新しい音楽、すなわちリヒャルト・シュトラウス、ブルックナー、マーラー、シェーンベルクらの音楽が台頭した。この世紀末には音楽に留まらず、絵画、建築、等においても新しい“分離派”芸術が現れ（Schorske, 1980）、しかもそれらの騎手はほとんどがユダヤ人であった。ウィーンの芸術・

文化がユダヤ人によって築かれたことはすでに述べたが（Masuda and Hübl, 1997）、多民族国家オーストリアではユダヤ人は比較的自由で、ある程度保護されていたこともその活躍の助けになったのであろう。

音楽の分野では、ロマン派と世紀末分離派の間の空間を埋めたのが大衆に根ざしたシュトラウスら「金の時代」の作曲家たちで、その意味ではウィーンおよび当時のドイツ圏における音楽の功労者であろう。本稿に登場したオペレッタ作曲家たちは当然ながらその中に入り、ウィーンの人たちにとっては無くてはならぬ存在であったし、現在でもその地位は変わらない。分離派音楽に相伴ってウィーン民衆の心を捉えたのは「銀の時代」の作曲家による音楽であった。これについては稿を改めたい。

本シリーズ「ウィーンのオペレッタ」で多くのオペレッタを紹介したが、1，2に納めたヨハン・シュトラウスは何といっても「金の時代」を代表する作曲家である。オペレッタに限らず、ワルツやポルカ、あるいはギャロップなど、19世紀ウィーン大衆音楽の中心をなしたのはまぎれもなくヨハン・シュトラウスであり、その音楽は今でも人の心を捉えて離さない。1899年、シュトラウスの死後暫く経ってから、ウィーン市立公園にシューベルトとともにシュトラウスの像が建てられた。除幕式の日、シュトラウスの像の前でウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が「青きドナウ」を演奏したという。筆者が長く見たその像は妖精を彫った純白のレリーフの中で漆黒のシュトラウスがヴァイオリンを弾く姿で、ボスコフスキーの音色にも似た美しい響きを私たちに聴かせてくれるかのようであった(図21)。この優雅なシュトラウス像は1991年、なぜか黄金色に塗り替えられ、すっかりシュトラウスのイメージが変わってしまった(図22)。筆者には初耳であったが、このシュトラウス像はもともと黄金色であったという説がある（小宮正安、2000)。黄金色に変わって以来、筆者はウィーン訪問の際、通りからはるかに眺めるだけで、像の近くには行かなくなってしまった。漆黒のシュトラウスこそ筆者にとっての真のシュトラウスに思えるので、この色に関しては機会を見て調べたいと考えている。

図21. 市立公園内にある、かってのヨハン・シュトラウス像。正面（左）と背面（右）、いずれも筆者の友人、ノース・カロライナ大学スコット（Tom K. Scott）教授が筆者のために撮ってくれた芸術的（？）写真。

オッフェンバック、シュトラウス、オスカー・シュトラウスらは皆多かれ少なかれユダヤ系の人たちである。また、面白いことに、シュトラウスは銀行家になるべく学校に行ったし、弟ヨーゼフははじめエンジニアであった。また、本稿に登場した4人のうちズッペとツェラーは始め法律を学んだ。他の分野でも、このような経歴の人はいるが、たとえば「輪舞」の作者シュニッツラーは医師であった。いわば、19世紀ウィーンでは人々は職業でも人種でも自由を持っていたから、後の世に残る芸術的、科学的活躍をすることができた、とも考えられる。

政治的、経済的には19－20世紀のウィーン民衆は苦難に満ちた状況に置かれた。しかし、彼らは楽観的で、苦労を楽しみに変える、というしたたかな、そして明るい、陽気な性質を持っている。ある面では排他的、保守的であるが、生活を楽観的に楽しむ、という長所を持っており、それは "Wiener Lieblinge in seinerzeit"(Masuda et al., 1998)などの歌に表れている。また、独特のオペレッタを楽しむ心にも表れている。オペレッタはこの意味においてウィーンの人々の血であり、肉であるだけでなく、今や世界中にオペレッタ・ファンがふえつつある所以であろう。

図22. 現在ある“黄金色”のシュトラウス像。

引用文献

加藤　雅彦（1998）　ライン河。岩波新書。岩波書店。

京大西洋史辞典編纂会編（1983）　新編西洋史辞典。東京創元社。

工藤　幸雄（1980）　ワルシャワ物語。ＮＨＫブックス、日本放送出版協会。

小宮　正安（2000）　ヨハン・シュトラウス。ワルツ王と落日のウィーン。中公新書、中央公論社。

清水　多吉（1980）　ヴァーグナー家の人々 ── 30年代バイロイトとナチズム。中公新書、中央公論社。

寺崎　裕則（1983）　魅惑のウィンナ・オペレッタ。音楽の友社。

野上　素一（1972a）ボッカチオ。世界大百科事典28．346頁、平凡社。

野上　素一（1972b）デカメロン。世界大百科事典21．213頁、平凡社。

増田　芳雄（1996）　ホロコーストの歴史的考察 ── ヴァイマール共和国と第三帝国と絶滅収容所。人間環境科学５：113－145.

安井　琢磨（1983）　「世紀末ウィーン」拾遺。学士会会報761：43－47.

安井　琢磨（1987）　シュニッツラーの初期作品 ── 岩波文庫訳を参照しつつ。図書（岩波書店）12月号ｐ.1－７.

山本　俊朗・井内　敏夫（1980）ポーランド民族の歴史。三省堂選書、三省堂。

渡辺　忠雄（1985）　ウィーン・オペレッタ物語。シュトラウシアーデ７：34－40.

渡辺　忠雄（1990）　ウィーン・オペレッタ探訪。オール出版。

渡辺　　護（1974）　ボッカチオ、楽曲解説。東芝EMI株式会社。

Masuda, Yoshio and Elisabeth Hübl (1997) Music and People's Life in Vienna. 帝塚山短期大学紀要34：141－165.

Masuda, Yoshio, Christina Hübl and Elisabeth Hübl (1989) Wiener Liebling in seinerzeit. 帝塚山短期大学紀要35：

Nick, Edmund (1954) Vom Wiener Walzer zur Wiener Operette. Musikverlag Haus Sikorski, Hamburg.

Scherle, Arthur (1974) Die schöne Galathee. Schallplattenpremiere. Eurodisc.

Scherle, Arthur (1982) Gasparone. Schallplattenpremiere. Eurodisc.

Schneidereit, Otto (1981) Operette A-Z. Ein Streifzug durch die Welt der Operette und des Musicals. Henschelverlag Kunst und Gesellschaft, Berlin.

Schorske, Carl E. (1980) Fin-de-Siecle Vienna: Politics and Culture. Alfred A. Knopf, New York（安井琢磨訳「世紀末ウィーン」岩波書店、1983）

Spiel, Hilde (1994) Glanz und Untergang, Wien 1886 bis 1938. Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG, München.（別宮貞徳訳「ウィーン黄金の秋」原書房、1993）

Würz, Anton (1978) Reclams Operettenführer. Philipp Reclam Jun. Stuttgart.